福岡市

板付周辺遺跡調査報告書第22集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第680集

2001

福岡市教育委員会

福岡市

板付周辺遺跡調査報告書第22集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第680集

2001

福岡市教育委員会

序

福岡市は古来より海外交流の拠点として栄えてきました。稲作農耕の最も早い伝播、定着を示す農村遺跡である板付遺跡。古代の対外交流の迎賓館である鴻臚館跡、貿易都市・博多、元帝国の侵攻にそなえ、博多湾の海岸線20kmにわたって築造された元寇防壘など、数多くの歴史遺産があります。

緑豊かな自然環境に恵まれた福岡市でありますが、アジアの拠点都市を目指して都市づくりが進んでいるため、変貌著しく、各種の開発事業によって失われてゆく埋蔵文化財も少なくありません。福岡市教育委員会では、文化財の保存と保護措置に鋭意努めているところであります。

福岡平野のほぼ中央に位置する板付遺跡は、大正6年、九州大学医学部教授であった中山平次郎博士によって初めて学界に紹介されました。昭和26年から日本考古学協会によって発掘調査が開始され、以後、明治大学、九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会へと発掘調査が引き継がれ、数々の発見がありました。環濠集落、最古の水田の確認は、板付遺跡が日本最古の農村遺跡の一つであることを確固たるものとしました。昭和51年には、遺跡の中心地が国史跡に指定され、平成7年度には指定地内の整備も終了し、弥生時代開始期の史跡として広く市民に親しまれているところです。

本書は、昭和52・53年度に発掘調査を実施した板付遺跡の成果の一部を報告するものです。本書に収録したのは、住宅新設に伴う、G－7c調査区の水田遺構とF－8b調査区の弥生時代中期の祭祀遺構の報告です。いずれも、福岡の歴史を解明するには欠かせない資料を提供しています。

発掘調査から報告書作成まで長時間を要する結果となりましたが、その間、ご指導いただきました先生方をはじめ、地元の皆様、発掘・整理作業員等、多くの方々のご協力を得ましたことに深甚の感謝を表するものであります。

本書が埋蔵文化財の保護と理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものであります。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会

教育長　生　田　征　生

例　言

1．本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和52・53年度に実施した福岡市博多区に所在する板付遺跡および周辺遺跡の民間宅地造成に伴う緊急調査の報告の一部である。本書に収録したのは、G－7c調査区、F－8b調査区の報告である。

2．本報告書に収録した発掘調査は文化課埋蔵文化財係の山崎純男、文化課板付遺跡調査事務所の沢皇臣、山口譲治が担当した。

3．本報告書に収録した写真の撮影には山崎、沢、山口の他、原　俊一、前田義人がこれにあたった。

4．本報告書に使用した図面の作成には、山崎、沢、山口の他、原、前田、木下尚子、森瀬圭子があたり、図の製図は山崎がこれにあたった。

5．本報告書の図面の北はすべて磁北である。

6．本報告書の執筆は山崎がこれにあたった。

7．本報告書の編集は山崎がこれにあたった。

遺跡調査番号　7716
遺跡略号　ITZ

本 文 目 次

第1章　はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査体制……4
3．板付台地の歴史……5
(1)　旧石器時代……5
(2)　縄文時代……5
(3)　弥生時代……8
①　最初の集落……8
②　前期の集落構造……10
③　初期水田の構造……13
④　墓地の変遷……14
⑤　墳丘墓の出現……16
⑥　中・後期の集落……17
⑦　青銅器の埋納……18
第2章　G－7c区の調査……19
1．調査区の位置……19
2．調査区の層序……20
3．出土遺物……27
第3章　F－8b区の調査……31
1．調査区の位置……31
2．調査区の層序……33
3．遺構……34
(1)　第1号土坑……35
(2)　第2号土坑……35
(3)　第3号土坑……35
(4)　第4号土坑……37
(5)　第5号土坑……37
(6)　A溝……38
(7)　B溝……38
(8)　C溝……38
4．出土遺物……39
(1)　第1号土坑出土遺物……39
(2)　第2号土坑出土遺物……41
(3)　第3号土坑出土遺物……42
(4)　第4号土坑出土遺物……43
(5)　B溝出土弥生土器……43
(6)　B溝出土石器……56

(7) B溝出土土製品……62
第4章 調査のまとめ……63
1．G－7c区の調査成果……63
2．F－8b区の調査成果……63

挿 図 目 次

Fig. 1 板付遺跡の地形と各調査区 …… 3
Fig. 2 板付台地出土の旧石器 …… 6
Fig. 3 板付遺跡出土の縄文土器 …… 7
Fig. 4 板付遺跡（中央・北台地）全図 …… 9
Fig. 5 板付遺跡の刻目突帯文土器の村 …… 10
Fig. 6 板付遺跡の貯蔵穴 …… 11
Fig. 7 板付遺跡G－7a・b区の刻目突帯文土器単純期の水田 …… 12
Fig. 8 板付遺跡G－7a・b区の板付Ⅰ式土器期の水田 …… 13
Fig. 9 板付田端出土の銅剣と銅矛 …… 14
Fig. 10 板付遺跡の墓（土坑墓・木棺墓・甕棺墓） …… 15
Fig. 11 板付遺跡の竪穴住居址（上、中期、下、後期） …… 16
Fig. 12 板付遺跡の井戸 …… 17
Fig. 13 板付遺跡、小銅鐸の埋納 …… 18
Fig. 14 G－7c区の位置 …… 19
Fig. 15 G－7c区 土層断面実測図Ⅰ …… 20
Fig. 16 G－7c区 土層断面実測図Ⅱ …… 21
Fig. 17 G－7c区 土層断面実測図Ⅲ …… 22
Fig. 18 G－7c区 土層断面実測図Ⅳ …… 23
Fig. 19 G－7c区 土層断面実測図Ⅴ …… 24
Fig. 20 G－7c区 土層断面実測図Ⅵ …… 26
Fig. 21 G－7c区 出土土器実測図 …… 28
Fig. 22 F－8b区の位置 …… 31
Fig. 23 F－8b区の位置と遺構 …… 32
Fig. 24 F－8b区 土層断面実測図 …… 33
Fig. 25 F－8b区 遺構全体図 …… 34
Fig. 26 第1号土坑実測図 …… 35
Fig. 27 F－8b区 第2～4号土坑と遺物出土状況実測図 …… 36
Fig. 28 F－8b区 第5号土坑とC溝実測図 …… 37
Fig. 29 第1号土坑出土遺物実測図 …… 39
Fig. 30 第2号土坑出土遺物実測図 …… 41
Fig. 31 第3号土坑出土遺物実測図 …… 42
Fig. 32 B溝出土土器実測図Ⅰ …… 44

Fig. 33　B溝出土土器実測図Ⅱ ……46
Fig. 34　B溝出土土器実測図Ⅲ ……47
Fig. 35　B溝出土土器実測図Ⅳ ……49
Fig. 36　B溝出土土器実測図Ⅴ ……50
Fig. 37　B溝出土土器実測図Ⅵ ……52
Fig. 38　B溝出土土器実測図Ⅶ ……53
Fig. 39　B溝出土土器実測図Ⅷ ……55
Fig. 40　B溝出土石器実測図Ⅰ ……58
Fig. 41　B溝出土石器実測図Ⅱ ……59
Fig. 42　B溝出土石器実測図Ⅲ ……61
Fig. 43　B溝出土土製品実測図 ……62

図　版　目　次

PL. 1　(1)　F－8b区全景
(2)　F－8b区近景
(3)　F－8b区土層断面
PL. 2　(1)　F－8b区　第1号竪穴
(2)　F－8b区　第3号竪穴
(3)　F－8b区　第3号竪穴遺物出土状況
PL. 3　(1)　F－8b区　第1号竪穴遺物出土状況
(2)　同、拡大
(3)　同、拡大
PL. 4　(1)　F－8b区　遺物出土状況
(2)　F－8b区　遺物出土状況拡大（把手）
(3)　ジョッキ形土器把手
(4)　壷破片
PL. 5　(1)　F－8b区　遺物出土状況
(2)　F－8b区　遺物出土状況（石庖丁片）
(3)　F－8b区　遺物出土状況（紡錘車）
PL. 6　遺物出土状況
(1)　石庖丁
(2)　石庖丁片
(3)　石庖丁未製品（失敗品）
PL. 7　(1)(2)　F－8b区出土打製石斧
(3)　G－7c区出土土器
(4)　G－7c区出土土器
(5)　F－8b区出土叩石

PL. 8　F－8b 区出土石器

(1)　ナイフ形石器、使用痕ある剥片、石庖丁未製品（失敗品）

(2)　同上裏面

(3)　石庖丁未製品（失敗品）

PL. 9　F－8b 区出土石器

(1)　石庖丁

(2)　石庖丁未製品（失敗品）

(3)　石鎌

(4)　石庖丁未製品（失敗品）、石斧

PL. 10　F－8b 区出土石器

(1)　抉入柱状片刃石斧、石斧、扁平片刃石斧

(2)　同裏面

(3)　今山産太形蛤刃石斧

(4)　同裏面

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

板付遺跡は福岡平野のほぼ中央に位置する。福岡市博多区板付2丁目から5丁目にかけての約80万㎡に広がる大規模な遺跡である。遺跡は弥生時代を中心とするが、一部に後期旧石器時代、縄文時代の遺物がみられ、弥生時代以降は、現在まで連綿と続く複合遺跡である。第3節において、板付遺跡の歴史を整理しているので参照されたい。

板付遺跡の存在は古くから知られていて、江戸時代の終り頃、遺跡の中心部にあたる中央台地に所在していた通津寺境内から広形銅矛5口が発見されたことが、『通津寺過去帳』に記録されている。大正時代の末期には、通津寺の南東に存在したと考えられる円墳状の高まりが土取り工事にあい、金海式甕棺とみられる前期末の甕棺群が発見され、数基の甕棺から細形銅剣・細形銅矛各3口が出土している。これを、当時、九州大学医学部教授であった中山平次郎博士が学界に報告され、（考古学雑誌第7巻第7号　1917）はじめて遺跡の重要性が認識された。この時出土した銅剣・銅矛等の青銅器は地元から東京国立博物館に提出され、現在も東京国立博物館に保管されているが、中山氏報文の銅剣・銅矛各3口より細形銅剣1口が増え、計7口となっている。詳細は明らかでないが、元々、7口が出土した可能性が強い。この甕棺群が発見された円墳状のたかまりの頂上部には、中山報文によると板状の大石が建てられていたとされ、大石の現物は史跡地内の一隅に現存する。円墳状の高まりとされた場所は、現在の知見では、弥生時代前期末の墳丘墓であった可能性が極めて高いと考えられる。

また、第2次世界大戦後、すぐに、地元の考古学研究者である中原志外雄氏によって通津寺境内近くの畑地の深耕に伴い、縄文時代終末期とみられていた刻目突帯文土器と弥生時代前期土器が共伴状態で採集された。これを受けて、昭和26年から開始された日本考古学協会、明治大学、九州大学を中心とした発掘調査は、縄文時代から弥生時代への移行過程、換言すれば、弥生時代開始期の諸問題の解明を意図したものであった。これらの発掘調査の成果は、当初の目的を充分に果たすものであった。成果として、集落を濠で囲む最古の環濠集落が明らかになり、環濠内には多数の袋状竪穴（貯蔵穴）も検出された。濠や貯蔵穴内からは炭化米をはじめ、土器の器面に残された籾圧痕、稲の収穫具と考えられる石庖丁、樹木の伐切具である太形蛤刃石斧、加工具である抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、あるいは武器である磨製石剣、磨製石鏃等の大陸に起源をもつ、いわゆる大陸系磨製石器の存在、縄文時代終末期の刻目突帯文土器（夜臼式土器）と弥生時代初頭の板付Ⅰ式土器の共伴関係から、日本列島における最古の稲作農耕の存在が確認され、弥生時代最古の農村の姿を具体的にうかびあがらせるのに成功したのである。また、弥生時代稲作農耕の放地が、共伴する大陸系磨製石器の形態等から朝鮮半島に求めることが推測できるようになった。日本列島の歴史の中で、自然に依拠した縄文時代から、自然を開拓し、生産する弥生時代に移行する歴史的な大変革の移行過程を明らかにする重要な成果が得られたのである。

昭和40年代後半にはじまる日本列島改造による開発の急増は、板付遺跡やその周辺地域においても例外ではなかった。遺跡の中心部をなす環濠集落をのせる中位段丘の西～北側の広大な水田地帯（沖積地）に、市営・県営住宅団地の建設が進められたことをはじめ、周辺都でも宅地造成等の開発が進められた。これらの開発に伴う緊急調査は福岡市教育委員会が担当して実施してきた。これらの開発に伴う緊急調査の成果も重要なものであった。環濠集落をのせる中位段丘Ⅱ面の西側沖積地では、弥

生時代以降～現代までの長期にわたる水田関連遺構が確認され、当時としては九州では数少ない木製農具をはじめとする木製品が多量に出土し、その内容は、弥生時代の農村の姿、道具を如実に示すものであった。なお、遺跡の範囲がさらに拡大することがわかった。板付遺跡の重要性はますます高まることとなった。

昭和51年6月21日には、日本歴史の解明に欠くことのできない重要な遺跡として、環濠集落部分を含む遺跡の中心部と、それに隣接した西側沖積地の水田遺構の計27796㎡が国の史跡として指定された。昭和63年からは、遺跡の保存・整備の基本計画を策定するために、「板付遺跡調査整備委員会」を発足させ、6名の専門の先生方と文化庁、福岡県教育庁を交えて「史跡整備はいかにあるべきか」の審議・検討を加えてきた。遺構の確認調査、整備事業の基本構想・基本計画等を検討した後、平成元年に文化庁の事業である史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）に採択され、整備事業に着手し、平成7年に完成し、現在、市民に広く公開しているところである。

板付遺跡および周辺遺跡は、その歴史的重要性から、昭和48年以来、民間の宅地造成や住宅建設に伴う遺跡破壊については、国庫補助金を受けて緊急調査を実施してきている。本報告書に収録した昭和52・53年度の調査地区は、史跡指定地内から、史跡保存のために指定地外への転出に伴う住宅建設が多く、遺跡保存のための措置が、指定地外の遺跡・遺構を破壊するという矛盾した現象を生み出す結果となった。

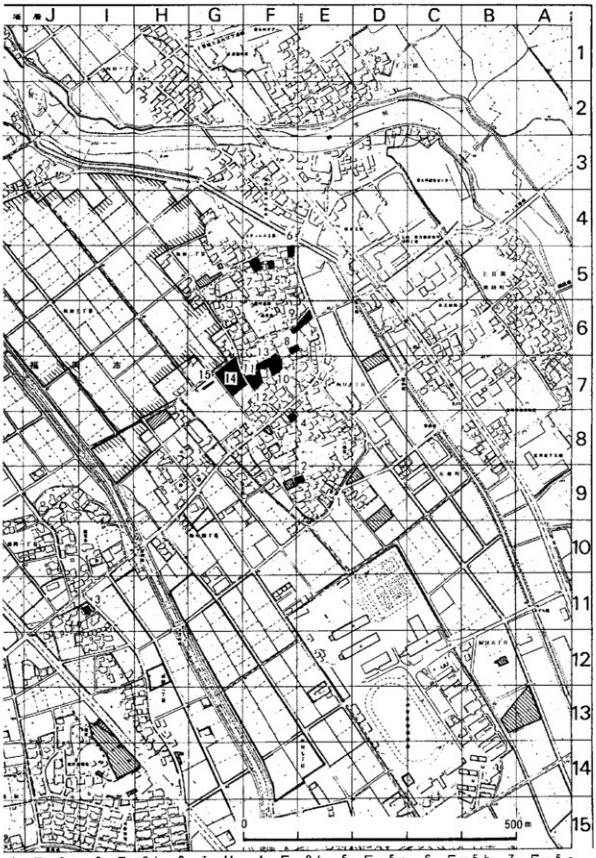
昭和52・53年度の発掘調査は史跡指定地周辺の15地区を対象として実施した。この中で本報告書に収録したのは G－7c 調査区、F－8b 調査区の2ヶ所である。G－7c 調査区は遺構保存を前提とした試掘調査であったために、一本のトレンチを設定したにすぎないが、G－7a 調査区で検出した刻目突帯文上器単純期、板付Ⅰ式土器期の水田遺構の延長部分を確認し、さらにその上部に、弥生時代前期以降の水田が重層的に検出された。また、トレンチの西端部に、西側沖積地の中央部を蛇行しながら北流する古諸岡川と考えられる自然流路が確認でき、水田と自然流路の関係を把握することができた。F－8b 調査区では小規模な竪穴状の遺構と溝状遺構があるが、各遺構の性格は明らかでない。ただし、出土遺物の中に祭祀用と考えられる丹塗り土器が多量に含まれ、滑車形耳飾りのような特異な遺物が存在している。調査区の位置が中央台地と南台地の鞍部にあたり、弥生時代も同様の鞍部をなしていたことを確認した意義は大きい。また、板付Ⅰ式土器段階に掘削された幹線水路の土手上にあたり、ここで何らかの祭祀が行なわれた可能性が強い。後章において検討を加える。

なお、昭和52年・53年度調査地区の概報は『福岡市板付周辺遺跡調査概報（板付周辺遺跡調査報告(5) 1977～8年度）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集、1979年として発刊している。また、F－5a 区、F－5b 区、F－6b 区の3ヶ所の調査区については、正報告書『板付周辺遺跡調査報告書第18集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第539集、1997年。F－5c 区、F－7a 区、F－7b 区、F－8c 区の4ヶ所の調査区については『板付周辺遺跡調査報告書第19集』福岡埋蔵文化財調査報告書第567集、1998年。G－7a 区、G－7b 区、G－7c 区、F－8c 区の4ヶ所の調査区の遺構については『板付周辺遺跡調査報告書第20集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集、1999年。G－7a 区、G－7b 区の2ヶ所の調査の出土遺物については『板付周辺遺跡調査報告書第21集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第640集、2000年を刊行している。

本報告書は G－7c 調査区、F－8b 調査区の正報告書である。各区の概要は以下のとおりである。

1．G－7c 区、板付5丁目1－1外、中牟田久人所有地、2100㎡、検出遺構、各時期水田址と関連遺構。

2．F－8b 区、板付5丁目7－18～20、世利昌子氏所有地、214.34㎡、溝2条、竪穴4基、井戸1基。



1. E－9a 2. E－9b 3. I－11 4. F－8b 5. F－5a 6. F－5b 7. F－5c
8. F－6a 9. F－6b 10. F－7a 11. F－7b 12. F－7d 13. F－7c 14. G－7a.b
15. G－7cの各調査区

Fig. 1　板付遺跡の地形と各調査区

2．調査体制

調査体制については、おりからの日本列島改造に伴う開発事業の急増により、埋蔵文化財の緊急調査件数が大幅に増加し、教育委員会文化課埋蔵文化財係では、緊急調査に対応する体制を完全にとることができない状況下におちいった。文化課では急拠、埋蔵文化財係と板付遺跡の調査に従事している板付遺跡調査事務所を合同させた調査体制を組み、市内遺跡の緊急調査に備えることとなった。昭和52・53年度の市内遺跡の緊急調査のうち、当班が担当した発掘調査は板付遺跡および周辺遺跡の15ヶ所、有田・小田部遺跡の３ヶ所、神松寺御陵古墳・神松寺遺跡の計19ヶ所である。有田・小田部遺跡、神松寺・神松寺御陵古墳については、すでに報告書を刊行しているので、詳細は下記の報告書によられたい。

『神松寺遺跡－弥生時代住居地と前方後円墳の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集　1978年。

『有田・小田部第６集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集　1985年。

『有田・小田部第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集　1994年。

『有田・小田部第23集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第470集　1996年。

調査地区　福岡市博多区板付５丁目

調査期間　1977（昭和52）年11月１～12月25日

　　1978（昭和53）年９月10～９月20日

調査主体　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係・板付遺跡調査事務所

調査関係者

調査指導委員

岡崎　敬（九州大学文学部教授、故人）

横山浩一（九州大学文学部教授、現・福岡市博物館顧問）

森貞次郎（九州産業大学教授、故人）

三島　格（福岡市教育委員会文化財専門委員、現・肥後考古学会会長）

藤井　功（福岡県教育庁文化課長、故人）

下條信行（九州大学文学部助手、現・愛媛大学文学部教授）

後藤　直（福岡市立歴史資料館館長、現・東京大学大学院教授）

福岡市教育委員会

教育長　戸田成一（当時）生田征生（現）

文化部長　志鶴幸弘（当時）

文化財部長　柳田純孝（現）

文化課長　清水義彦・井上剛紀（当時）

埋蔵文化財課長　山崎純男（現）

埋蔵文化財係長　三宅安吉（当時）

調査第１係長　山口譲治（現）調査第２係長　　力武卓治（現）

庶務・会計　安田正義・河鍋好輝（当時）・宮川英彦・御手洗　清・岩屋淳美（現）

発掘調査担当

山崎純男（文化課埋蔵文化財係、現・埋蔵文化財課長）

沢　皐臣（文化課板付遺跡調査事務所、現・宮崎県考古学会）
山口譲治（文化課板付遺跡調査事務所、現・埋蔵文化財課調査第１係長）
横山那継（文化課板付遺跡調査事務所、現・埋蔵文化財課主任文化財主事）
調査補助員
原　俊一・前田義人・奈良崎和典・森瀬圭子・小野由美子・村上順子・伊崎俊秋・木下尚子・田口真理・久保智康・山田威洋・市橋重喜・松永幸男・為貞由紀・連見信也・谷豊信・出利葉浩司・福岡大学歴史研究会諸氏）
整理作業員
久賀登世子・小松原澄江・藤アイコ・矢川みどり

3．板付台地の歴史

板付遺跡およびその周辺の歴史的環境、周辺遺跡については、これまで度々、福岡市埋蔵文化財調査報告書においてふれられている。詳細はそれらの報告書にゆだね、ここでは、板付台地とその周辺の沖積地における考古資料から、板付台地の歴史を素描することにする。なお、ここでとりあげる時代は後期旧石器時代から、板付遺跡の最盛期の弥生時代までを中心として検討し、古墳時代以降については稿を改めてふれたいと思う。

(1)　旧石器時代

現在、板付遺跡に残された人間の足跡は後期旧石器時代まで溯る。明確な遺構や遺物包含層は確認されていないが、これまで進めてきた、板付遺跡の各調査区から、弥生時代の遺物に混入した状態で、旧石器が出土している。これまで出土した旧石器は Fig. 2 に図示した。ナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器、細石核、使用痕ある剥片等がある。断片的な資料であるが、一応、AT 以降の石器群が一通りそろっているとみられる。これらの石器は板付団地建設用地の沖積地や板付北小学校庭の北台地、中央台地の北側調査区、環濠南側の県道用地内調査区等から出土している。後述するように、本報告書に収録した中央台地と南台地の鞍部に位置する F－8b 区からも古銅輝石安山岩を素材とした使用痕ある剥片とナイフ形石器が出土している。これらの石器の存在は、周辺部に旧石器時代遺跡が存在するか、かって存在していたことを語るものである。板付台地の西南に位置する諸岡の台地では３ヶ所の旧石器時代の遺物包含層が調査されている。板付の台地も同様の状態で旧石器時代遺跡が存在した可能性は強い。

ちなみに、図示した石器を簡単に説明すると、１、２は黒曜石の角礫を素材とした細石核、３～５は黒曜石の縦長剥片を素材とした小型のナイフ形石器、６は黒曜石製の台形石器、７は古銅輝石安山岩の縦長剥片を素材としたナイフ形石器、８、９は黒曜石製の台形様石器、10は黒曜石製の三稜尖頭器、11～13は黒曜石製のナイフ形石器で基部に平坦剥離をもつ。14は古銅輝石安山岩の使用痕ある縦長剥片である。

(2)　縄文時代

縄文時代の遺跡は、板付団地建設に伴い、１ヶ所の遺物包含層が調査され、やゝ離れているが、那珂君休第４次調査区内において２片の押型文土器が出土している。

板付団地建設に伴い調査された縄文遺跡は中央台地北側の西側の沖積地、古諸岡川左岸の低位段丘

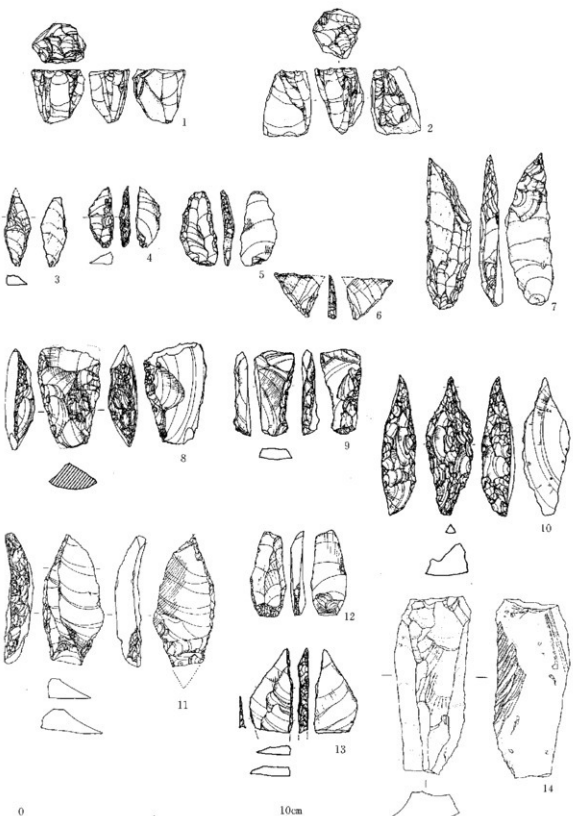


Fig. 2　板付台地出土の旧石器

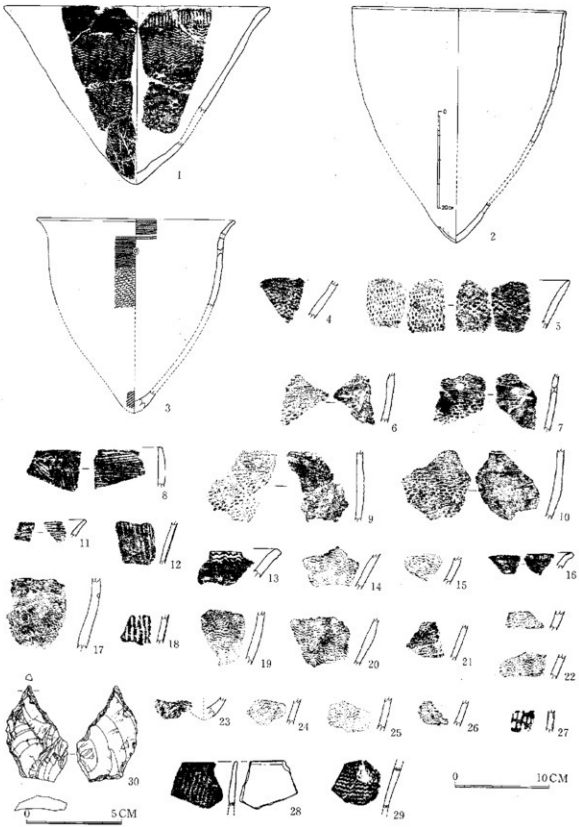


Fig. 3　板付遺跡出土の縄文土器

上に立地している。基盤の八女粘土層の再堆積層の直上の黒色粘土層の上半部が遺物包含層となっている。遺跡の範囲は東面40m、南北80mにおよんでいる。遺跡は出土土器から縄文時代早期に比定される。出土遺物は Fig. 3 に示した。出土遺物には土器と石器がある。出土土器には押型文土器、撚糸文土器、無文土器、刺突文土器がある。いずれも早期の所産である。代表的な土器をみてみよう。1は押型文土器、尖底から体部は傾斜しながら直線的にたちあがり、口縁部がわずかに外反する。外面は無文帯をおいて山形文が横走施文され、内面は口縁に縦方向の原体条痕とその下位に山形文が横走施文される。早水台式に比定される。2は無文土器、尖底から体部は外傾しながらたちあがり、上半部は直立にちかいたちあがりをみせ、口縁端部は丸くおさめる。3は尖底から体部は外傾しながら、やゝ丸みをもってたちあがり、口縁部は外反する。口縁下に補修孔がみられる。文様は口縁部に撚糸文、胴上半に撚糸文に密接して楕円押型文が横走施文され、底部は撚糸文が施文され、撚糸文と楕円押型文が帯状に交互に横走施文される珍しい土器である。他はいずれも、撚糸文土器、楕円押型文土器、山形文土器の破片であり、全てが横走施文されている。これらの土器群の構成は単純で、大分県で早水台式土器と呼ばれている押型文土器である。27は刺突土器で唯一の出土例である。小破片であるため型式的な検討はできない。石器は30に示した吉鎖輝石安山岩を素材とした石錐以外にスクレイパー1点があるのみである。28、29は那珂君休遺跡の流路から出土した押型文土器で、8は楕円文、9は山形文を横走施文している。時期的には板付遺跡と同様と考えられる。諸岡遺跡でも押型文土器1点が出土しているので、周辺部に点々と押型文土器の遺跡が存在することが予想できる。板付遺跡における押型文土器期の遺跡の確認は重要な成果である。特に、その立地が、埋没した低位段丘面であることは、縄文時代の遺跡立地を考える上で示唆的である。また、板付遺跡周辺で、押型文土器段階以降、刻目突帯文土器の段階まで、縄文時代遺跡が存在しない空白期を解明する上でも重要である。

(3) 弥生時代

板付台地および周辺において、人間の生活が大きく展開するのは弥生時代になってからである。Fig. 4 は板付遺跡の中央台地から北台地にかけての、これまでの発掘区と弥生時代の遺構を集成したものである。これらの成果により、弥生時代の板付村をながめてみよう。

① 最初の集落（Fig. 5）

板付遺跡の開始はこれまで、環濠の調査成果から、板付Ⅰ式土器と刻目突帯文土器の共伴期とされてきたが、G－7a、7b 区の水田遺構調査の成果から、その開始は刻目突帯文土器単純期まで溯ることになった。では、最初の集落はどこにあるのであろうか。未だ、その解決はついていない。しかし、可能性のある遺構が最近わかってきた。環濠の南西約100m 離れた台地西側一帯である。この地区は第60次調査をはじめ、過去3回にわたって発掘調査が実施され、地形も含めてその内容が、ほぼ明らかになってきた。調査区と遺構の関係は Fig. 5 に示した。

先ず、地形を復原的にみてみよう。Fig. 4 にみるように環濠の西から一つの尾根が北西に向って延びるが、その先端がこの地区にあたり、第60次調査区との間に小さな谷が形成される。最初の集落は、この谷を開むように立地している。かって、この地区には刻目突帯文土器が濃い密度で出土していたが、第60次調査区で検出された円形竪穴住居址から刻目突帯文土器が単純に出土したことにより、周辺に分布する遺構の多くは刻目突帯文土器の段階まで溯ることがわかってきた。集落を構成すると考えられる遺構をあげてみよう。先ず、住居として、先の円形の竪穴住居址一棟があり、そのすぐ北側には2間×2間の掘立柱建物一棟、南側には1間×4間の掘立柱建物一棟、また、この建物のすぐ西側の谷部に1間×3間の掘立柱建物1棟がある。すなわち、住居と考えられるのは竪穴住居址1棟、

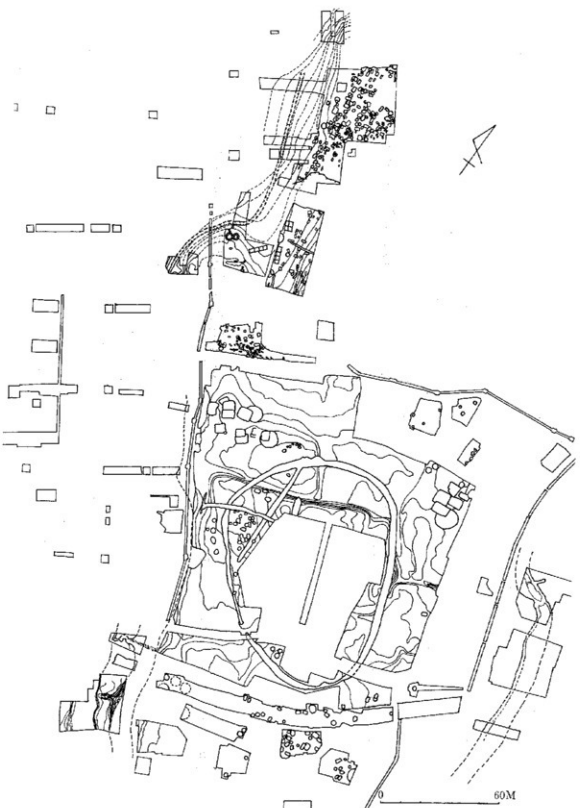


Fig. 4　板付遺跡（中央・北台地）全図

Fig. 5　板付遺跡の刻目突帯文土器の村

掘立柱建物３棟から構成されている。竪穴と掘立柱建物の違いが、何によるものであるかは現時点では明らかにできない。谷をはさんだ西側の尾根の先端には、細い溝が円形にまわる遺構２基がある。これらは、同様の遺構が検出された雀居遺跡の成果から、家蓄小屋とみることができる。さらに、これら家蓄小屋の南側には貯蔵穴と考えられる。やゝ大きな土坑が分布している。さらに南側にあるG－5a 区の第２号竪穴からは、刻目突帯文の甕形土器３個が単純に出土している。ちなみに第２号竪穴は、本来一辺約120cmの隅丸方形プランを有していたと考えられ、現存の深さは約24cmである。このことから考えて南側に貯蔵穴の一群があったことは疑いなかろう。さらに、住居群の東側には土坑墓と考えられる一群が分布している。時期の決めてはないが、これらのうちのいくつかの土坑墓は、この集落の人々の墓であったと考えることはそう無理なことではない。そうすれば、刻目突帯文土器の時期の最初の村は、竪穴、掘立柱建物４棟を中心に、西に２基の家蓄小屋をもち、南に貯蔵穴群を配し、東に墓地を形成した集落が想定される。

②　前期の集落構造（Fig. 4）

前期、板付Ⅰ式土器段階の集落は一変して大規模になる。板付台地の中で最も広い面積を有する中央台地の中央部に大規模な環濠が掘削される。南北110m、東西81m の卵形の平面プランをもつ。環濠の北西部は直線的な濠（弦状濠）によって半月形の区画がつくられている。弦状濠は北で、環濠から分岐し、南西部では内濠との間に幅5.0m の陸橋が形成されている。環濠も南西部に溝4.0m の陸橋が形成されている。陸橋は出入口であったことは明瞭であるが、削平のため詳細な構造は不明である。環濠、弦状濠は現状で幅１～５m、深さ１～2.5m、断面Ｖ字形をなす。濠底は平らでなく部分的に

深くなったり、浅くなったりしている。削平を考慮し、復原すると、幅4～6m、深さ2.5～3m、濠内の堆積から、環濠には両側に弦状濠には西側に土塁がつくられていたとみられ、土塁の高さは濠の上量から高さ1～1.5mが推測される。環濠内に住居址は検出されていないが、削平ため消失と考えられ、住居が存在した蓋然性は高い。弦状濠によってつくられた半月形の区画内には40基前後の貯蔵穴が密集し、相互に切り合い関係をもちながら検出された。この区画が貯蔵穴を囲む目的をもっていたことは容易に推測することができる。

貯蔵穴はFig.6に示すように、方形ないしは長方形プランを有し、時期が新しくなると円形プランに変わる。深さは1～2mが一般的で、断面形が袋状をなすので袋状竪穴とも呼ばれている。一部には貯蔵穴内に柱穴をもつものもあり、上に屋根をふいたものもある。米等の穀物の貯蔵や土器等を入れた例があり、穴倉として使用されたことは明らかである。

板付遺跡では弦状濠に囲まれた貯蔵穴群以外にも貯蔵穴の集中区がみられる。北台地、中央台地環濠南側、南台地の3ヶ所がそれである。北台地では、中央部に墓地と重複するように検出されているが、貯蔵穴が墓より先行する。方形、長方形プランを主に、106基－αが存在する。中央台地では環濠外の南側に接して、方形、長方形、円形プランの貯蔵穴が混在して57基－αが存在する。ここの貯蔵穴群は北台地の貯蔵穴が密集して存在するのに対し、一定の間隔をもって分布し、切り合い関係も少なく、日常的な使用を意図していたことがうかがえる。中から炭化米が点々と出土することは使用を考える上で示唆的である。南台地は分布等は把握できるにいたっていないが、現在、8基＋αが存在する。板付台地では計211基＋αの貯蔵穴が確認されているが、それぞれに関連性がありながらも、場所によって使用目的が異なっていたと考えることができる。墓地については後述する。

ここで、前期の集落構造について若干のまとめと問題点の指摘をしておこう。前期の集落が前段階に比較し、飛躍的に大規模になることは先に指摘したとおりである。この集落の構築には多くの労力を要し、大土木工事であったことは想像に難くない。環濠や後述する水田水路の掘削をはじめとする土木工事を考えれば、この集落が自然発生的に生まれたものではなく、また、無計画につくられたものでないことは明白である。換言すれば、板付の集落の形成にあたっては、綿密な計画のもとに実施されたとみるのが自然であろう。遺構等の分布から計画性を探ってみることにする。現在確認している遺構からすると、集落構築にあっては、大きな方針として、あるいは思想の底流として、環濠を中心に、北側は非日常的な世界、南側は日常的な世界として二分する意識が存在している。例は後述する墓地群は、いずれも環濠北側に存在し、環濠南側には、先に指摘したように、日常生活に利用されたと考えられる貯蔵穴が、一定の間隔をもって分布していることからも肯首されよう。中央台地の頂部を中心として存在する環濠内には、貯蔵穴群を弦状溝で区画するなど、極めて計画的である。この濠に掘まれた貯蔵穴には、この集落にとって、最も重要な物資が貯蔵されたと考えることができる。立証する遺物は数粒の炭化米が出土しているにすぎないが、

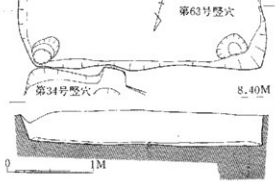


Fig. 6　板付遺跡の貯蔵穴

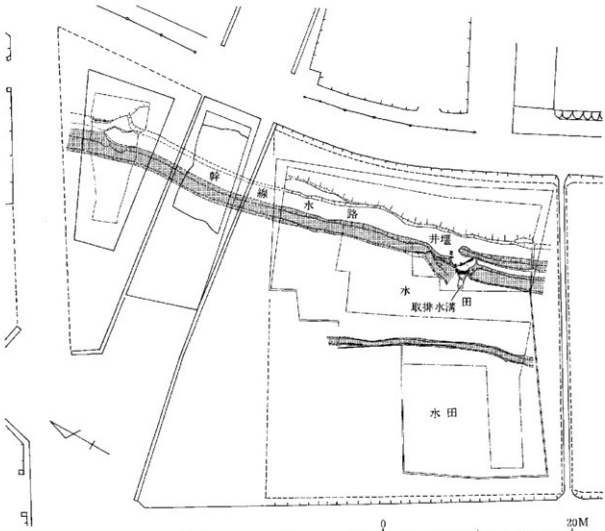


Fig. 7　板付遺跡 G－7a・b 区の刻目突帯文上器単純期の水田

筆者は種籾を含めた収穫米の貯蔵にあてられたと考えている。この貯蔵穴の区画は、以後、貯蔵穴のみを囲む環濠へ展開したと考えられる。宗像市光岡長尾遺跡の環濠の面積は板付の区画の面積に近く、環濠内には貯蔵のみが存在する。出入口は南北に２ヶ所の陸橋があり、陸橋部には幅がせまく深い溝が横断し、ネズミがえしとしている。板付の環濠の陸橋は南西部に一ヶ所のみであるが、主たる生産地が台地際の西側沖積地であることを考えれば、極めて合理的な位置に配置されていると言える。この出入口の延長線の幹線水路には橋がかけられ、上流部には井堰が配置されている。環濠出入口の左側は先に指摘した日常的な生活の場である。農作業の準備や処理はここでおこなわれていたと考えられる。

問題点は刻目突帯文土器期の集落と環濠集落を中心とした前期集落の関係である。刻目突帯文土器期の遺構には、一応、刻目突帯文土器のみが出土する遺構もあるが、出土土器の形態は差小さい。また、板付で最初に作られた村としては、集落立地の悪さがあり納得いかない面もある。両集落が時間的には同時併存の可能もある。そうすれば、集落の解釈もまた違ったものになる。今後の検討課題としておこう。

③ 初期水田の構造

初期水田は中央台地西側の沖積地、G－7a・7b区で検出した。西側の限りは、本報告に収録したG－7c区に明らかなように、古諸岡川の土手までである。南限は中央台地と南台地の間の被部西側の沖積地までで、北限については未だ把握していないが、北台地西側より拡がることはないと考えられる。

G－7a・7b区で検出した刻目突帯文土器単純期の水田（Fig. 7）と、その上層で検出した板付Ⅰ式土器期の水田（Fig. 8）から初期水田の構造をみていこう。

刻目突帯文土器単純期の水田で確認された遺構は、幹線水路およびそれに直交して設置された井堰、取排水溝、畦畔等がある。幹線水路は中央台地に沿って掘削されている。水路幅約2.0m、深さ約1.0m、断面形はU字形～逆台形をしている。発掘によって、約50mを確認している。わずかに蛇行するが、ほぼ直線をなしている。この水路に設置された井堰はG－7a区で1ヶ所検出されている。水路に直交して杭が打ち込まれ、横木をわたした簡単なものであるが、保存状態はきわめて悪い。井堰の上流すぐに、水田に対する取排水溝が設置されているが、井堰の規模からすれば、取排水溝毎（水田1区画）に井堰が設置されていた可能性が強い。取排水溝部分はやゝ複雑である。この地点よ

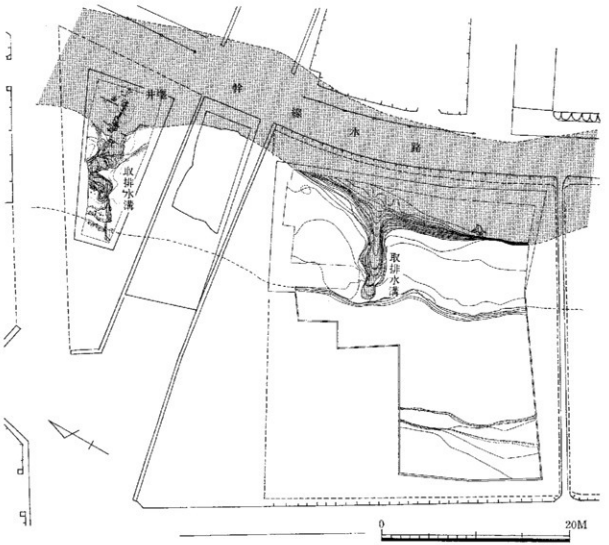


Fig. 8　板付遺跡G－7a・b区の板付Ⅰ式土器期の水田

り上流には、幹線水路に平行し、西側に一本の溝が走っている。この溝は上流部にある水田から排水するための溝である。この溝も取排水溝の前面で幹線水路に合流するが、この合流点にも横木を渡した簡単な堰が設けられ、溝から排水された水をこの堰で貯水し、取排水溝から水田へ給水している。すなわち、排水を給水に切り変える施設として機能している。取排水溝は水田への給水と水田からの排水を兼ねた水口であるが、ここにも水量調節のための堰が設置されている。刻目突帯文土器単純期の水田は、三重に堰を設け、水をコントロールするすぐれた設備をもっていたことがわかる。取排水溝は排水による侵蝕で水田側に後退しているが、それに合せて畦畔を曲げている。畦畔は二条検出されている。水路際の畦畔はやや大きく、幅約1.5m、高30cm、水田を区画する畦畔は幅約80cm、高さ20cmである。大畦畔は水路に沿って約50m、小畦畔は大畦畔より約10m 離れて平行しているが、約21m を確認した。水田区画は地形によって南北に細長い。水田耕作土は黒褐色粘土層で、厚さ10～15cm。表面には足跡の凹みもみられる。耕作土中からは炭化米も出土している。

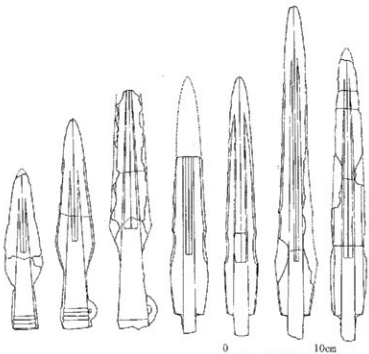


Fig. 9　板付田端出土の銅剣と銅矛

板付Ⅰ式土器段階の水田構造も、刻目突帯文土器単純期の水田構造と、ほとんど同じであるが、規模が大きくなる。幹線水路は前段階同様に中央台地に沿っているが、幅は約10m と拡がり、蛇行しながら北流している。G－7b 区では、これを塞ぐ井堰がつくられている。井堰は直径20cm前後の丸太で基礎の骨組みがつくられ、数百本の杭を打ち込んだ大規模なもので、現存部は二段になり、高さは２m を越えている。幅10m の自然堤防状の土手には水田と水路を結ぶ取排水路が２ヶ所に設けられ、途中に小規模な堰がつくられ、水量調整がおこなわれている。水田側の畦畔には矢板が打ち込まれ、水田耕作土表面には無数の足跡が残っている。水田区画は下層水田同様に南北に細長い。G－7a・7b 区の初期水田構造は良く似ており、共に整備された水田であり、水稲農耕伝播の当初から、完成された農業技術体系が伝播したことがわかった。木製農耕具や石庖丁等も当初からそろっている。

④　墓地の変遷

板付台地で発見されている前期の墓地は５ヶ所存在する。５ヶ所の墓地の配置と内容は以下のようになっている。環濠を中心にみていくと、最も環濠に近い墓地は、環濠と弦状濠の交わるすぐ北側に存在する７基の小児甕棺墓から構成されている。出土状況から径10m 前後の墳丘墓の可能性もある。２基に小壺が副葬され、他の２基からは碧玉製の管玉が出土している。計４基の甕棺墓に副葬品があることは注目される。この小児甕棺墓地から北西に約40m 離れた所に、小児墓だけからなる墓地が形成されている。木棺墓、土壙墓、甕棺墓から構成され、現在28基が検出されている。このうち１基

より石剣の切先1点が出土している。この墓地よりさらに北に20m離れた所から北側に120m以上の範囲にわたって大規模な共同墓地が形成されている。この墓地には成人、小児の墓が混在している。Fig. 10に示した土壙墓、木棺墓、甕棺墓から構成されている。相互に切り合い関係があるが、木棺墓が時期的に先行し、甕棺墓は前期末からはじまり、中期までおよんでいる。現在まで68基が検出されているが、これまで削平破壊されたものや未発掘部を含めると100基を越える墓からなっていたと考えられ、本遺跡における主体の墓地とみることができる。以上、三ヶ所の墓地は、いずれも環濠の北側に形成されており、先に指摘した非日常的な世界をつくり出している。この他、後述する板付田端の墓地は環濠の南東部に位置する。南台地の南端部で木棺墓1基が調査されているので、南台地にも墓地が形成されたとみられるが、規模、その他については不明である。

ここで、墓地からみた問題点を指摘しておこう。墓地が五ヶ所に分かれて形成されていることは熟考する必要がありそうである。それぞれの内容の概要は先に指摘したとおりであるが、それからすると、墓地間に隔差があることが指摘できる。小児墓地について若干検討してみよう。環濠に最も近い小児墓地は7基と基数も少なく、わずかではあるが副葬品をもち、その保存率は高い。出土状況から墳丘をもっていた可能性が高く、

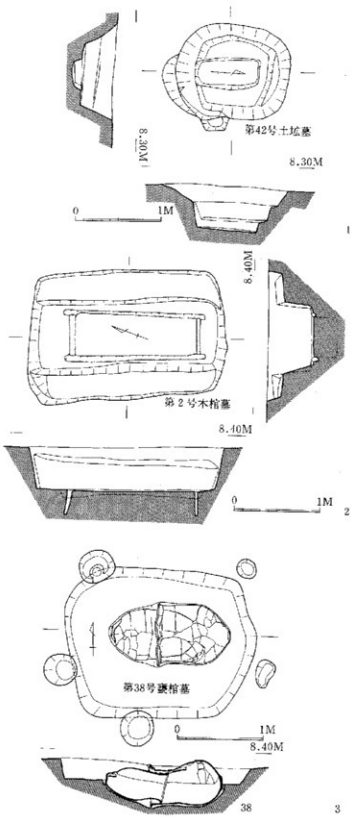


Fig. 10　板付遺跡の墓（土壙墓・木棺墓・甕棺墓）

他とは区別される。選ばれた子供あるいは集落内の有力者の子供の墓とみられる。この北側は小児墓のみからなり、石剣切先の出土から不慮の死をした者も含まれていたと見られる。小児墓に限られた特殊な墓地形成は、さらに北側に存在する成人墓と小児墓の混在した共同墓地の小児墓とは区別される。つまり、一般とは区別された墓であることがわかる。このように、小児墓には三種類の墓が認められる。この差異が生前の差異を反映していると見れば、少なくとも、弥生時代開始期から何らかの階層性が存在していた可能性は強い。

⑤　墳丘墓の出現

環濠の東南部に位置する板付・田端の甕棺墓地は大正五年に発掘され、大正六年に中山平次郎によって『考古学雑誌』に報告された遺跡である。報告から発見された場所の状況や甕棺の出土状況をみてみよう。

発見場所は「国道に沿へる板付新町より南折し、田端村落に入らんとする小路東側に位せる。陸地測量部地図中神社符号の記入せられたる地点にして、近年迄址部には地緑天神社を存したりといふ」ところで、「以上の社地は元来二畝餘の広さに於て田地面より一丈餘の高さを保ちたる円墳状隆起として存せしが如く、道路に面に接せる北及西の両側は傾斜甚だ急に、又田圃に面せる南及東の両側に、少しく緩に、比南側より神祠に登るべき石段無き小路を通し、祠は南方に向ひたりといふ」出土状況は「大正五年三月以来地上げ其他の用土採掘の為逐次以上の隆起を勘去したりしに、其数ヶ所於て周囲に粘土を填め二口宛口を合せて横に埋めたる口頸二尺許深さ三尺餘の大甕を発見し、之を破砕したりしに其内部に朱と思しき赤き色料を交へたる土壌を認め、其中三ヶ所のものより六口の鉾及剣を見出したりといふ。甕の埋もれたりしは地表下約四五尺の部分なりと。甕の埋没したる個所数は六ヶ所許なる由なるも其実数審ならず」としている。すなわち、発見場所は現在の指定地の南東隅の東側にあたり、そこに約200㎡の広さ（径15～20m か）の円墳状の高まり

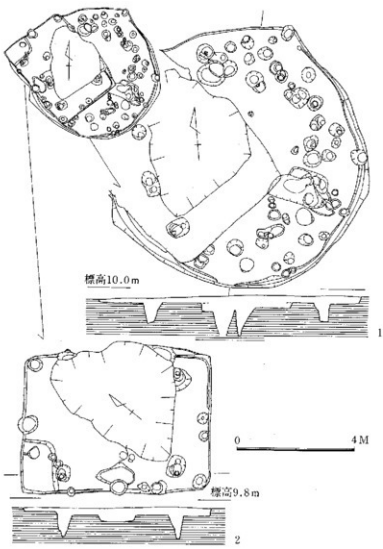


Fig. 11　板付遺跡の竪穴住居址（上、中期、下、後期）

（田地面より約3ｍの高さ）があり、そこから合口の甕棺６基が出土し、そのうちの三基から銅剣・銅矛各３口が出土したものである。

この状況は、現在の知見からすれば、明らかに弥生時代の墳丘墓である。この時出土した甕棺は中山氏の報告から、金海式甕棺である。この時出土した銅剣、銅矛は現在、東京国立博物館に保管されているが、銅剣が４本に増加している。（Fig.９）

前期末には、板付台地周辺を治めた首長層が出現したことを物語っている。

⑥　中・後期の集落

中・後期には中央台地に掘削された環濠はほとんど埋まり、住居址は環濠に制約されることなく、中央台地の全面に拡がっているが、台地が後世に削平を受けているので、台地頂部付近でほとんど残っていず、台地の周辺部にかろうじて遺存している状態である。ただし、環濠南西部からのびる尾根上は、削平の度合が少なく、住居址の遺存状態は比較的良好である。中・後期の住居址が数軒重複し、それがある一定の間隔をもって分布している。このような状態が中央台地全面にひろがっていたとみることができよう。Fig. 11に示した住居址は、中期の円形住居址と後期の長方形住居址の切り合ったものである。ここで、住居址の構造に若干ふれておこう。中期の円形住居址は東西径8.7m、南北径8.8m、壁の高さ約27cm、壁に沿って幅10cm、深さ５cmの壁溝がめぐるが、部分的に存在していないところもある。炉あるいは中央部の土坑は攪乱によって失われている。主柱穴は９～10本が円形にめぐる。柱穴の切り合いから数回の建て替えが行われている。主柱穴の二ヶ所に埋納遺物がある。一つは翡翠製の勾玉、他の一つには立岩産の石庖丁が完形で埋納されている。この住居址は規模が大きいことも特徴の一つである。後期の長方形の住居址は北西に長軸方向をとっている。長軸長6.4m、短軸長4.7m を測る。壁の遺存高は約26cm。壁に沿って幅６cm、深さ４cmの壁高が部分的にめぐる。北西コーナーから北壁に沿って幅110cm、長さ170cm、高さ10cm前後のベット状遺構がある。炉址は床面中央にあったと考えられるが、近世攪乱によって失われている。主柱穴は４本で南壁中央部に２ヶ所、北壁中央部に１ヶ所の棟持ち柱と考えられる柱穴がある。北側の棟持ち柱と考えられる柱穴には完形に近い甕形土器とガラス小玉２が埋納されていた。

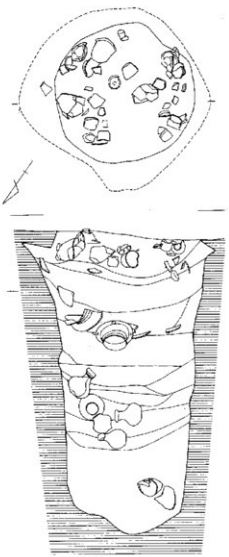


Fig. 12　板付遺跡の井戸

住居址以外に、居住空間を示す遺構に素堀りの井戸がある。主に中期後半のものが多いが、一部、中期中頃や後期前半のものが含まれている。現在、検出されている井戸は20基前後で、ほぼ、中央台地の全面に分布している。この井戸の分布は、先の住居址の分布の推定を裏づけるものである。井戸には、丹塗りの土器を投げこまれた例が非常に多い。水に対する祭祀行為と考えられる。Fig. 12に

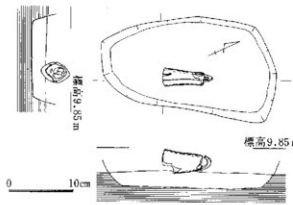


Fig. 13　板付遺跡、小銅鐸の埋納

示したのは、田端で検出した井戸である。中期後半から後期にかけて使用されている。井戸の埋没に関連して都合4回の土器の集積があり、この井戸に対して4回以上の祭祀がおこなわれたことがうかがえる。中期には、南台地にも居住空間が大きく広がったと考えられるが、調査区が少ないため、その実態は明らかでない。後期には南台地の集落は大きい拡がりをみせる。

中期の墓地は、2ヶ所で、前期から継続されている。一ヶ所は、環濠の北西部約40mにある小児用墓地で、他の1ヶ所はさらに北にある共同墓地である。前期同様に小児墓地と成人墓と小児墓が混在する共同墓地に分離して埋葬がおこなわれていることは興味深い。しかしながら、集落の現模等を考えれば、墓の数が少なく、他の場所に新しい墓地が形成された可能性がある。現在、南台地において、中期の甕棺墓の発見はないが、今後、発見される可能性は強い。

なお、これまでに中央台地西側に堆積する土器に伴って、広形銅矛等の鋳型が複数出土しており、板付遺跡内においても、青銅器の鋳造がおこなわれたことが判明しているが、それらに関連した遺構は未発見である。今後に期待しておきたい。

⑦　青銅器の埋納

板付遺跡における弥生時代の終焉を示す遺構に青銅器埋納がある。一つは江戸時代の終末期に発見されている。通津寺過去帳には、中央台地の環濠に囲まれた中心部にあった通津寺境内から、広形銅矛と考えられる銅矛5口が発見されていることが記されている。

また、遺跡整備に伴う遺構確認調査において、前節で紹介した後期の長方形住居址の埋土に掘り込まれて埋納された小銅鐸一個がある。出土状況はFig. 13に示した。埋納坑は確認面で長軸で26cm、短軸で13.5cmの不整楕円形で、深さは2.5cmであるが、発掘によって上部を削平してしまったので、元来はもっと深さがあったと推測される。埋納状況はこれまでの小銅鐸と異なり銅鐸と同じで、鰭の部分を上下にして横たえたものである。鐸身には舌が遺存する。

このような、青銅器の埋納をもって板付遺跡の弥生時代は終りをむかえたと思われる。以後の古墳時代は、集落は存在するものの大きな展開はみられない。

第2章　G－7c区の調査

1．調査区の位置

G－7c区は、刻目突帯文土器単純期、板付Ⅰ式土器期の水田遺構を検出したG－7a区（『板付遺跡周辺調査報告書第20集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集、1999年収録）のすぐ西側の水田地帯に位置している。調査対象区は70m×30mの東西に細長い水出となっていた。この地に高層の共同住宅建設の計画がもちあがり、遺跡の有無・G－7a区の水田の拡がりを確認するために、東西に

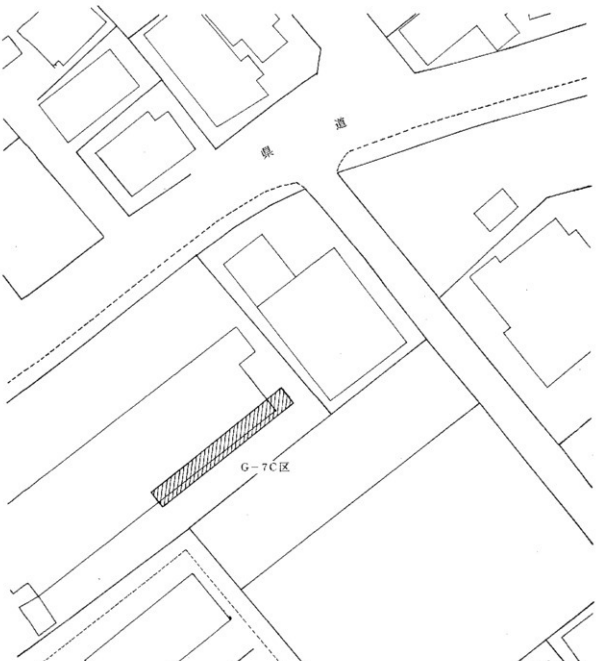


Fig. 14　G－7c区の位置

約40mの試掘トレンチを入れ、土層観察を行うこととした。試掘調査の掘削は基盤までかなりの深さがあると予想されたので、重機を利用した。実際に、水田面から基盤層まで2mを越す深さがあり、土層中には粗砂層を介在している部分が処々にあり、トレンチ壁面の崩落が心配された。よって、安全確保のため、試掘トレンチの幅を4mにして、1mの深さに掘り下げた段階で、その中心部分に幅2mのトレンチを設定し、掘り下げる二段掘りの方法で実施した。試掘トレンチの土層観察の結果、刻目突帯文土器単純期から板付Ⅰ式土器期を経て、以降連綿と続く各時期の水田耕作土が確認できた。G－7a区の水田遺構がさらに西側に拡がることが確認できた。しかし、この水田遺構の拡がりは、試掘トレンチの西端部において、この沖積地の中央を蛇行しながら北流する古諸岡川の東岸部を検出したことから、おのずとその西限が確認できた。古諸岡川はこれまでの発掘調査やボーリング調査によって、川幅は氾濫原を含めて約100mを有し、弥生時代中期には、ほぼ埋没することがわかっている。なお、試掘トレンチの古諸岡川の落ち際の埋土から、板付Ⅱb式土器～中期初頭の土器と共伴して、大型の楔1点が出土している。

調査対象地には高層の共同住宅建設予定であったが、設計変更をお願いし、基礎が全面におよぶ部分を自然流路（古諸岡川）にあたる西側に配置し、水田遺構が存在する東側については杭のみによる基礎とし、遺跡の保存に務めた。

2．調査区の層序

本調査区の概要は『板付周辺遺跡調査報告書第20集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集、1999年においてふれたが、板付遺跡の初期水田の構造を考える上では極めて重要であるので改めて、各層序と断面にあらわれた遺構および出土遺物について詳報する。

発掘した試掘トレンチは約40mと長く、層序はかなり複雑である。トレンチの東側は整然とした水平堆積である。これを基本層序とする。西側はこの基本層序の中にいくつもの層が介在し遺構となるが、説明の中では基本層の上下を表記し、最後にアルファベットの小文字をもって示したいと思う。

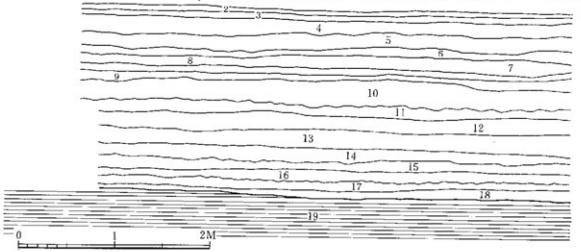


Fig. 15　G－7c区　土層断面実測図Ⅰ

例ば第4層と第5層の間の層は第4・5－a．b……層という表現で示す。なお、試掘トレンチの0点は、G－7a区調査区の西端より約50m西に離れている。

Fig. 15は0m～6mの層位である。水平堆積で基本的層位を示している。第1層．現水田耕作土、黒灰色の砂質土層で厚さ15cm前後。第2層・第3層は酸化鉄・マンガンが沈着した水田床土、厚さは共に5cm前後、トレンチ東側で明瞭に2層になっているが、7.5mの地点より西側では一枚の層となり、やゝ厚さを増す。第4層．黒褐色粘土層、厚さ15～30cm。第5層．暗黒褐色粘土層、厚さ10～15cm、水田耕作土の可能性が強いが時期不明。第6層．黒灰色粘土層、厚さ5～15cm、この層の表面は凹凸があり、凹みは足跡の可能性があり、この層も水田耕作土の可能性が強い。第7層．若干の粗砂を混入した黒灰色粘土層、厚さ10～15cm。第8層．粗砂の混入が目立つ黒灰色粘土層、厚さ8～10cm。第9層．若干の砂を含んだ黒灰色粘土層、厚さ8～18cm。厚さが一定していないが、この層は水田耕作土と考えられる。第10層．黒灰色粗砂層、厚さ20～30cm。トレンチの全域にわたって厚く堆積している。G－7a区の板付Ⅰ式土器期の水田を覆う粗砂層と同一の層と考えられる。第11層．細砂を若干含んだ黒灰色粘土層、厚さ10～14cm。層の表面は凹凸が顕著である。足跡等の跡であることはG－7a区の調査成果からも明らかである。G－7a区の板付Ⅰ式土器期の上層水田に対応する水田耕作土である。第12層．黒灰色粘土層、厚さ15～20cm、G－7a区の板付Ⅰ式土器期の下層水田耕作土に対応する層である。第11層と第12層の間にはG－7a調査区でみられた粗砂層は存在しない。粗砂層の拡がりから洪水の規模がある程度推測することができる。下層水田段階での洪水は、水路に近いG－7a区には粗砂層の堆積がみられるものの、本トレンチ・G－7c区にはおよんでいないことから、そう大きい洪水でなかったと推測される。一方、上層の粗砂層はG－7a区や本トレンチの全域におよんでおり、また、水路際の立木が倒壊していることから、かなり大きな洪水であったと考えられる。水田の遺棄は洪水の規模に左右されていたことがわかる。第13層．上層よりやゝ粘性の強い黒灰色粘土層、厚さ15～20cm。第14層．上層よりさらに粘性の強い黒灰色粘土層、厚さ10～15cm。第13・14層は水田耕作土の可能性があるが、確証はない。第15層．粘質度の強い暗黒色粘土層、厚さ10～15cm。層の表面は凹凸が顕著であるが、凹みは浅い。凹みは足跡等のものと考えられる。G－7a区の突帯文土器単純期の上層の水田耕作土に対応する層と考えられる。第16層．上層よりやゝ明るい色調の暗

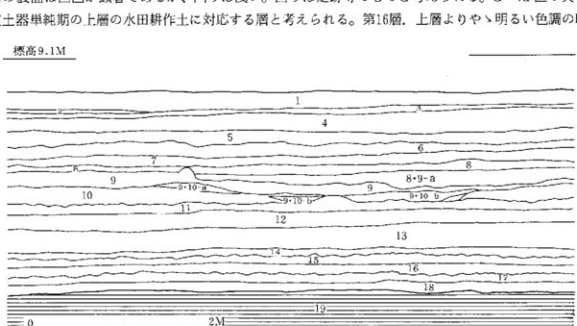


Fig. 16　G－7c区　土層断面実測図Ⅱ

黒粘土層、厚さ6～10cm。第17層．第15層と同様の暗黒色粘土層、厚さ10～15cm。この層の表面も凹凸が著しい。G－7a区の突帯文土器単純期の下層水田の耕作土に対応すると考えられる。第18層．黒色粘土層、厚さ5～12cm。この層は低位段丘の全面に堆積している層位である。前述したように、この層に、縄文時代早期の遺物が包含されている部位がある。第19層．基盤層である八女粘土層（再堆積層の可能性もある。）となっている。

Fig. 16は6m～12m間の層位である。基本的には Fig. 15に示した層位と同様であるが、若干の違いがある。水田床土である第2層は基点から7.5m の地点で消え、第3層の一枚だけになる。近世における水田の部分的な改良がうかがえる。次に、第9層において基点より8mの所に畦畔状の高まり（幅20cm、高さ10cm、断面形は半円状をなす）が形成され、第9層が水田耕作土であることを裏付けている。なお、この畦畔より西側には新たな層、8・9－a層がみられる。この層は若干の砂を含んだ黒灰色粘質土層、厚さ10～20cm。第9層水田耕作土の改良に伴う土層と考えられ、この層も水田耕作土と考えられる。第9層と第10層の間にも、レンズ状に堆積する小範囲の層が存在する。基点より8mの地点を中心に長さ1mにおよぶ。厚さは最も厚いところで10cmを測る。黒灰色の粗砂を含んだ砂層（9・10－a層）。9・10－b層は基点より9mの地点を中心に長さ60cmの堆積である。厚さは最も厚い所で10cmを測る。黒灰色粘土層である。間を約20cmおいて西側も黒灰色粘土層となり、第10層は堆積していない。ただし、基点より11mより東に約40cmの長さで9・10－b層が9・10－a層を切断するように斜に堆積している。厚さは厚い所で10cmの黒灰色粗砂層である。第11層は板付Ⅰ式土器段階の上層水田の耕作土に対応するが、基点より7.5mの所に畦畔と考えられる高まりが観察できる。畦畔は幅約40cm、高さ10cm前後で、断面形はカマボコ状をなす。以下の層位は前述した基本層位に変化はない。

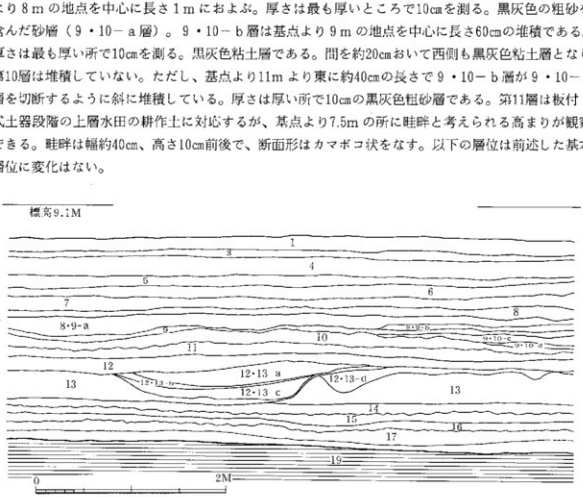


Fig. 17　G－7c区　土層断面実測図Ⅲ

Fig. 17は12m～18m間の層位である。第1層から第8層にかけては、現在の水田床土である第2層がなくなる以外は基本層位に変化はない。Fig. 16から続く8・9－a層はこの区間でも水平に堆積し、基点より13m前後の所で最も厚くなり、厚さ20cmを測る。この層は基点より16mの所で2層に分かれる。8・9－b層は8・9－a層より砂が多い黒灰色粘土層となり、厚さ10cm前後である。

9層と10層の間にも新たな層が2層形成されている。9・10－c層は基点より16mの所から始まる。厚さ5～10cmの黒灰色の粗砂をはさみ込んだ粘土層である。9・10－d層は前者のすぐ直下に堆積する。基点より17～18mの間に存在する。厚さ5cm前後の黒灰色粘土層で、9・10－c・d層は共にレンズ状の堆積をなしている。12層と13層の間には溝状の遺構が確認できる。溝状遺構1は基点より13.12mから15.26mの間の幅2.13mを測り、断面形は浅い逆台形状をなす。深さ26cm。溝状遺構2は溝状遺構1のすぐ西に隣接する。幅80cm、深さ20cm、断面U字形をなす。溝状遺構内の土層堆積は両者共に同じであり、時間的同時性を示している。上層より12・13－a層、暗黄灰色粗砂層、厚さ20cm前後。溝状遺構2の部分は若干薄くなる。12・13－b層、黒灰色の粗砂をはさんだ粘質土層。厚2～4cmと薄い。12・13－c層、溝状遺構の最下層、暗黄灰色、厚さ10～20cm。溝状遺構2より西側は同層が第13層の上面を薄く（厚さ6cm前後）覆う。また、基点より17.5mの所で、同層の下面に落ち込みがみられ、溝状遺構と考えられる。溝状遺構3は幅約20cm、深さ10cm、断面形はV字形をなす。第14層以下は基本土層と同じである。

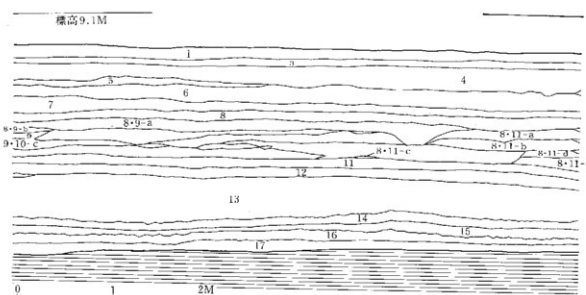


Fig. 18　G－7c区　土層断面実測図Ⅳ

Fig. 18は18m～24m間の層位である。第1層から第8層までは第2層が消えている以外は基本層位と同じである。第8層から第11層の間に新しい層が形成され、やゝ複雑になる。第8層の直下には8・9－a層がさらに西側に延び、基点より23mの所まで達している。厚さ10cm前後で水平に堆積しているが、西端部で落ち込みがみられる。落ち込み部は断面形がU字形をなし、溝状遺構4とした。溝幅約50cm、深さ約15cmを測る。堆積層は若干の砂が混入した黒灰色粘土層である。8・9－b層は東側からのびてくる層であるが、基点より18.5mの所で収束する。砂を混入した黒灰色粘質土層、厚さ約6cm。第9層は8・9－b層とほぼ同じ地点で収束する。第9層が一部覆う。9・10－e層は基点より18.2mより始まる。ほぼ水平に堆積するが、西側にむかって薄くなり、溝状遺構4の東側部で終っている。暗灰色砂層で4東側の厚い所で約20cm、西側の薄い所で4cm前後、端部では1cm前後と非常に薄くなる。9・10－e層の直下には東側から延びる9・10－c層が続き、基点より19.64mの所で終るが、端部の35cmは一坦とぎれ凸レンズ状の堆積をしている。黒灰色の粗砂をはさみこんだ粘土層、厚さ10～5cmである。9・10－c層の西側には新たに9・10－f層が介在している。

9・10－f層は基点より19.4mより始まり、溝状遺構4の東壁を形成し、終っている。厚さ10～15cmの暗灰色粗砂層。溝状遺構4の西壁を形成する層も介在層である。8・11－a層は基点より22.4mより始まる。粗砂を混入した黒灰色粘土層、厚さ10cm前後。8・11－b層の始まりは前層と同様、暗灰色粗砂層で厚さ10cm前後である。（介在層は幅がせまく、前後関係が複雑で、かつ、一定の長さで縦割したので、層名がかならずして上下関係を示していない部分もある。）これらの下にある層も複雑である。8・10－a層は基点より20.2mの所から始まり、23.4mの所で終っている。厚さ5～20cm、白灰色の細砂層である。この層の東端部の下位には8・10－b層が堆積している。基点より19.9mより始まり、長さ85cm、厚さ4cm、レンズ状に堆積する粗砂層を含んだ黒灰色粘土層である。8・11－c層は基点より21.6mの所に長さ30cm、厚さ3cm前後のレンズ状に堆積した黒灰色粗砂層。8・11－d層は基点より23.3mより始まり西に延びる層位である。厚さ10cm前後の粗砂層を含んだ黒灰色粘土層。その下位に8・11－e層が堆積する。黒黄灰色粗砂層で厚さ10～20cm、さらに西に延びる。第11層以下は基本層位に同じである。この間の第13層は序々に厚さを増し、50～100cmを測る。

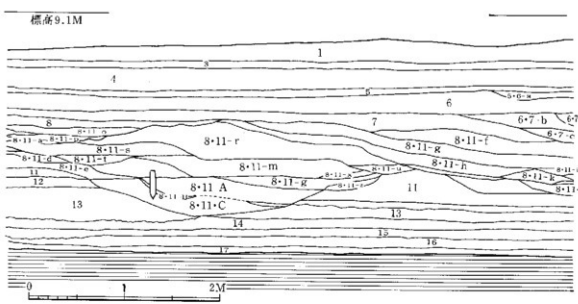


Fig. 19　G－7c区　土層断面実測図V

Fig. 19は24m～30m間の層位である。水路状の溝が切り合い複雑な層位関係を示している。第1層から第8層は基本的に水平堆積で基本層位を保っているが、第5層と第6層の下位に新しい層が介在する。4・5－a層は基点より29.1mの所から始まる。粗砂を含んだ黒灰色粘土層、厚さ6～10cmで堆積する。6層下位に新しく始まる層位は浅い皿状の凹みを埋め、レンズ状の堆積を示している。6・7－a層は基点より29.8mの所から始まる。マンガン、木炭片を混入した黒灰色粘土層、厚さ12cm前後。6・7－b層は基点より28.8mの所から始まる。砂粒を若干混入した黒灰色粘土層、厚さ20cm前後。6・7－c層は6・7－b層と同様の層であるが、若干砂の混入が少ない。厚さ15cm前後。共に西側に延びる。7・8層の下位に堆積する層は水路（溝状遺構）の堆積である。8・11－f層は基点より27.85mより始まる砂を混入した黒灰色粘土層、厚さ10～15cmである。8・11－g層は基点より26.5mの所から始まる。上層の8・11－f層とほぼ同様の土層であるが、砂粒を含み、上層よりやゝ粘性が強い黒灰色粘土層で、厚さ15cm前後で堆積している。8・11－h層は基点より26.2mの所から始まり、29.6mの所で終る。長さ3.4m、厚さ10～15cm。上層より砂粒を多く含み、レンズ状に

堆積している。８・11－ｉ層は８・11－ｈ層に連なる層であり、粗砂を混入した黒灰色粘土層とほぼ同じである。基点より29.6m の所から始まり西に延びている。厚さ５cm前後。８・11－ｊ層は基点より29.9m より始まる。粗砂を混入した黒灰色粘土層で厚さ10cm前後。上層とほぼ同様の層である。８・11－ｈ層は基点より29.2m の所から長さ80cmでレンズ状に堆積する層で厚さは14cm前後。木片・木炭を多く含んだ黒灰色粘土層である。８・11－ｋ層は基点より28.2m の所から始まり、30.7m で終る長さ1.1m、厚さ４cm前後の薄い堆積層である。粘土がしま状に介在した黄灰色砂層。８・11－１層は基点より29.75m の所から始まる。厚さ３cm前後の薄い粗砂を混入した黒灰色粘土層である。８・11－ｍ層は水路（溝）の下部を占める層位で、基点より29.4m の所から始まる。黄褐色粗砂層で厚さ12cm前後である。８・11－ｎ層は溝の側壁から床面にかけて堆積する層である。基点より28.6m の所から始まり、29.8m で終る。長さ1.2m、厚さ15cm前後でレンズ状に堆積している。砂を多く含んだ黒灰褐色粘土層。８・11－ｆ～ｎ層は溝状遺構５の埋土であり、いずれも西側に延びている。溝状遺構５の規模等は後述するが、基点より26m から28m の間で溝状遺構６を切っている。溝状遺構６は基点より24.4m から28.3m の間に形成される。溝幅3.9m、深さ約50cm、断面形は浅い皿状をなす。溝状遺構６の埋土はいずれもレンズ状の堆積を示している。前の区間からのつながりを加えて層位を説明すると以下のようになる。８・11－ｏ層は最も上層に堆積する黒灰色粘土層、基点より23.9m の所から始まる長さ1.5m、厚さ10cm前後のレンズ状の堆積を示す。直下の８・11－ａ層は前区間から延び、24.3m で収束する。粗砂混入の黒灰色粘土層、この区間では薄く４～８cmの厚さである。８・11－ｐ層は24.0m から25.6m 長さ1.06m のレンズ状堆積の暗黒色粗砂層、厚さ６cm前後。８・11－ｑ層は23.9m から24.58m の長さ約60cmのレンズ状堆積の粗砂混入の多い黒灰色粘土層、厚さ４cm前後。８・11－ｒ層は遺構のほぼ全体を覆う。基点より24.75m の所から始まり、28.1m の所で終っているが、西側と上面は溝状遺構５によって切られている。最も厚いところで40cmを測る。黒灰色砂層。８・11－ｓ層は前区間からの続きで、基点から26m に集中する。層の長さは2.1m、厚さ15cm前後のレンズ状堆積の黒黄灰色粗砂である。８・11－ｂ層も前区間からの続きで約15cmのびるだけである。８・11－ｔ層は基点より24.5m から始まり25.6m で終る長さ90cm、厚さ10cm前後の粗砂を混入した黒灰色粘土層でレンズ状に堆積する。８・11－ｕ層は基点から27.6m から28.3m の間の70cmに厚さ10cmでレンズ状に堆積する。やゝ砂を含んだ黒灰色粘土層。元来はさらに西側に延びていたと考えられるが、溝状遺構５によって切られている。８・11－ｖ層は基点より23.9m の所からわずか24cmの長さで厚さ４cm堆積した暗灰色砂のブロック層である。８・11－ｄ層は前区間からのびる層位で基点より24.7m の所で終る。厚さ８cm前後の粗砂を含んだ黒灰色粘土層である。８・11－ｗ層は基点より25.3m より始まり、27.8m で終わり、溝状遺構６の大部分にかかっている。厚さ20cm前後の黒灰色粘土層である。８・11－ｘ層は溝の東側に片寄ってレンズ状に堆積する。基点より24.9m から26m の長さ1.1m、厚さ20cmの粗砂層が混入した黒灰色粘土層である。８・11－ｘ層、ｙ層は溝の西側に片寄ってレンズ状に堆積する。ｘ層は長さ60cm、厚さ８cm前後の黄白色砂層。ｙ層は長さ1.8m、厚さ15cm前後、やゝ砂を多く含んだ黒灰色粘土層。８・11－ｚ層も同様に溝の西側壁に沿って堆積する。長さ60cm、厚さ10cm前後の黄褐色粗砂層。溝の東壁に沿って堆積するのは前区間から延びる８・11－ｅ層である。基点より25.4m の所で収束している。厚さ20cm前後の黒灰色粗砂である。溝の下位に堆積するのは次の３層である。８・11－Ａ層は基点より25.4m より始まり27.4m で終る。長さ２m、厚さ20cm前後の黄灰色粗砂層。８・11－Ｂ層は溝の両端部にみられ、中央部は不明瞭、レンズ状の堆積、厚さ４cm前後、粗砂を多く混入した黒灰色土層。最下層の８・11－Ｃ層は基点より24.85m から始まり26.9m で終る。厚さ20cm前後の黄灰色粗砂層である。溝の東側には杭が打ち込

まれている。第11層以下は基本層位と同じである。

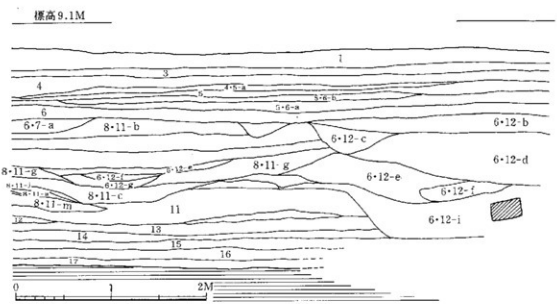


Fig. 20　G－7c区　土層断面実測図VI

Fig. 30は30m から35.7m にかけての層位である。第１層～第４層は第２層が欠落する以外、大きな変化はない。第４層以下に新しい層が介在してくる。この区間は沖積地の中央部を北流する古諸岡川に近いために、洪水等が頻繁におこり、層位もかなり複雑になっている。４・５－ａ層は基点より30.1m の所から始まり、西は基点より34.7m で終っている。厚さ５㎝前後で水平に堆積している。鉄分、マンガンが沈着し、若干の粗砂を含んだ暗褐色粘土層である。木炭片も多量に含まれている。５・６－ｂ層は基点より30.5m の所から、西側は34.4m まで延びている。厚さ５㎝、粗砂を若干含んだ暗褐色粘土層。５・６－ｂ層は前区間から延びてくる層である。厚さ５～10㎝、上層より粗砂の含有量が少なく、木炭片を含んだ暗褐色粘土層である。下層には第６層が拡がるが、以下は第11層までは消滅し、12層の一部以下が残っているにすぎない。第６層と第12層の間には古諸岡川に由来すると考えられる土層堆積がみられる。６・７－ａ層は前区間から延びる層で基点より30.9m の所で終っている。厚さ20㎝、レンズ状に堆積する。マンガン、木炭片を混入した黒灰色粘土層である。６・７－ｂ層も同様に前区間から延びる層である。基点より32.5m の所で終る。厚さ10～20㎝、砂粒を若干混入した黒灰色粘土層である。６・７－ｃ層も前区間より延びてくる層である。基点より33.3m の所で終る。厚さ15～20㎝。砂の混入が上層より少ない黒灰色粘土層である。６・12－ａ層はレンズ状堆積をなす。基点より32.4m より始まり、長さ55㎝、厚さ14㎝の砂粒をやゝ多く含んだ黒灰色粘土層である。６・12－ｂ層から６・12－ｄ層は古諸岡川が埋った段階の流路の堆積と考えられる。いずれもレンズ状の堆積をしている。６・12－ｂ層は基点より33.1m より始まり西にのびる。厚さは10～20㎝で西に向かって厚くなる。粗砂層をはさみこんだ黒灰色粘土層である。６・12－ｃ層は始まりは上層と同じであるが、たまりの状態で長さは約１m と短かい。厚さ約30㎝、若干の砂を含むが、粘性の強い黒灰色粘土層。６・12－ｄ層は基点より33.55m より始まり、西にのびる。厚さは30㎝～55㎝。西に向かって厚さが増す。若干の砂を含んだ黒灰色粘土層である。以上の層は流路の氾濫原の堆積とみられる。８・11－ｆ層は前区間より延びる層で、基点より33.3m まで延びる。厚さ10㎝～20㎝、砂を混入した黒灰色粘土層。６・12－ｅ層は基点より30.3m より始まり、32.4m の所で終るレンズ状

堆積である。砂を多く含んだ黒灰色粘土層。下には同様のレンズ状堆積をした6・12－f層がある。長さ90cm、厚さ10cmの砂がしま状にはいる黒灰色粘土層。さらに下位には6・12－g層が存在する。長さ約11m、厚さ10cm前後、黒灰色粘土層である。8・11－g層は前区間から延び、基点より33.5mで終るが、レンズ状堆積するために中央部で分断している。砂を若干含んだ黒灰色粘土層である。厚さ10～20cm。8・11－i層は前区間から延びる層であるが、大部分は本区間内に存在する。基点より32.2mで終る。レンズ状堆積で、厚さ10～20cmを測る。粗砂を混入した黒灰色粘土層である。ある時期の溝底となっている。8・11－j層は前区間から延びる層で薄く堆積している。基点より30.7mで終っている。粗砂を混入した黒灰色粘土層で、上層とほぼ同様である。厚さ5～10cm。8・11－k層は前区間から薄くのびてくる。上層とほぼ同地点で収束する。木片・木炭片を多く含んだ黒灰色粘土層である。本区間では厚さ5cm前後と薄い。8・11－l層は基点より30.4mで終る。厚さ3cm前後の薄い粗砂を混入した黒灰色粘土層である。8・11－m層はある時期の溝底に堆積した層である。基点より31.0mの所で終る。厚さ16cm前後の黄褐色粗砂層である。6・12－e層からi層は古諸岡川の氾濫原に堆積した層である。後述する前期末～中期初頭の遺物はこれらの層から出土している。6・12－e層は基点より32.8mより始まり35.3mで終る長さ2.1m、厚さは最大で約40cmのレンズ状堆積をなしている。砂を多量に含んだ黒灰色粘土層。6・12－f層は6・12－e層にまきこまれるように堆積している。基点より34.3mから始まり、長さ約1m、厚さは15cm前後である。青灰色砂層である。6・12－g層は基点より32.2mより始まり、約1.1mの長さ、最大厚は10.0cm前後、凸レンズ状に堆積する黒灰色粘土層である。6・12－h層は基点より32.0mより始まり、長さ約0.8m、厚さ8cm前後、上層より粘性の強い黒灰色粘土層で凸レンズ状に堆積する。6・12－i層は河川の肩部から川にかけて堆積する。基点より32.8mより始まり西に延びている。厚さ10～40cm、西にしだいに厚くなる。若干砂を含んだ黒灰色粘土層。同層より大型の梯1点が出土している。13層以下は東から延びる層位で大きな変化はない。第13下に13・14－a層がレンズ状に堆積する。基点より31.8mより始まり、33.5mの所で終っている。長さ1.7m、厚さ10cmでレンズ状に堆積する。黒灰色砂層である。

以上がG－7c区の層位である。大部分の層が水田に関連したものである。板付Ⅰ式土器期、刻目突帯文土器単純期の水田の拡がりが、合地西側の沖積地中央部を北流する古諸岡川の所まで存在することが判明する重要な成果を得ることができた。

3．出土遺物

いずれも古諸岡川の埋土上層、6・12－e層～6・12－i層から出土したものである。土器約50点と木製梯1点がある。梯については実測未了のため別の機会に紹介し、本報告では土器のみについてふれる。

出土土器はいずれも前期末から中期初頭に比定されるもので、層位的にも、板付Ⅰ式土器期の水田よりも上層にある。古諸岡川の埋没時期を知るのに有効である。甕形土器と壺形土器があるが、壺形土器は非常に少ない。甕形土器は口縁部形態から、Ⅰ類、如意形の口縁をもつもの。Ⅱ類、如意形の口縁をもち、口縁下に刻目突帯を貼り付けるもの。Ⅲ類、口縁部と口縁下に二条の刻目突帯を貼り付けるものの三類に分類できる。

甕形土器Ⅰ類（Fig. 21－1、2、5）

1は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸くおさめ、刻目は施文されていない。口縁下の胴上位に沈線一条がめぐらされている。外面は縦方向のやゝ粗い刷毛目を施すが、全体がやゝ磨滅し、明瞭で

ない。沈線は刷毛目調整後にめぐらされている。内面の胴上半部には指圧痕が縦位に残っている。外面にはススが付着している。復原口径25.4cm、胴部のふくらみは少ない。胎土には多量のやゝ大粒の砂粒（花崗岩）が混入され、やゝ不良。焼成は良好、色調は外面が黄白色、内面が白灰色をなす。2は復原口径22.6cm。口縁部は大きく外反し、口縁端部は平坦に仕上げられ、横方向のナデ調整が見られる。外面は縦方向の粗い刷毛目調整で、口縁部はさらに横方向のナデ調整が加えられ、刷毛目が消されている。ススの付着が顕著であるが、ススは口縁端部にはおよんでいない。口縁部内側は横方向の粗い刷毛目調整。胴部には多方向のナデ調整が加えられている。胎土は1と同様に多量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は外面はススのため黒色、内面は白褐色をなす。5は口縁部がわずかに外反する。口縁端部にはナデが加えられ、平坦になっている。外面には細い丁寧な縦位の刷毛目調整が加えられる。口縁下約2cmの間には横方向のナデが加えられ刷毛目痕を消している。内面はナ

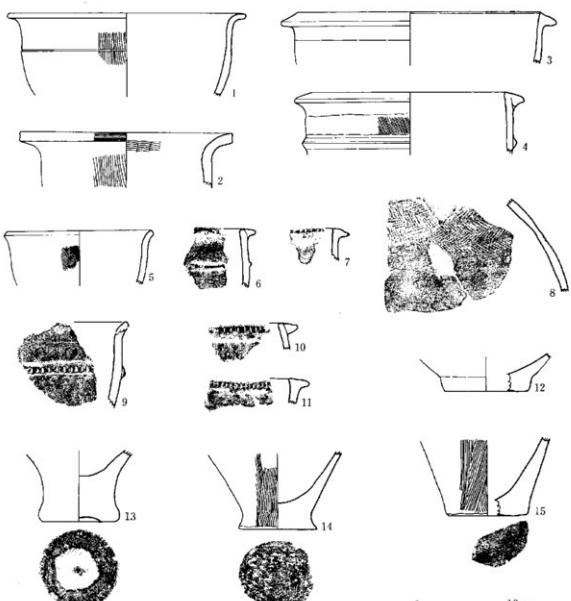


Fig. 21　G－7c区　出土土器実測図

デ調整。復原口径15.8cmの小型品。胴部は張らず直線的にのびる。胎土は１、２同様に多量の砂粒が混入され良質でない。焼成は良好。色調は外面が白灰色～黒褐色、内面が褐色をなす。

壺形土器Ⅱ類（Fig. 21－９）

１点が存在する。口縁部を欠失するため詳細は不明であるが、破片からみて大きくは外反しないとみられる。口縁をやゝ下った所に幅広の刻目突帯が貼り付けられている。刻目はヘラで頂部に浅く刻まれている。外面は細かい不定方向の刷毛目調整が加えられているが、横方向のナデ調整によって消されている。内面の調整は磨耗し不鮮明であるが、口縁下に指頭圧痕と思える凹みがならんでいる。胎土には多量の砂粒を含み、あまり良質ではない。焼成は良好、色調は外面が赤褐色、内面は黄白色をなす。

壺形土器Ⅲ類（Fig. 21－３・４、６、７、10、11）

３は復原口径33.2cm、口縁部は断面がやゝ長い三角形をなし、平坦面は下方に傾斜している。口縁下にはナデが加えられている。内外面共に横ナデ調整とみられる。外面にはススがわずかに付着しているが、もともとは顕著に付着していたとみられ、変色している。胎土には多量の砂粒が混入されているが、器面では目立たない。焼成は良好。色調は外面が灰褐色、内面は白灰色をなす。４は復原口径24.4cmを測る。口縁部は断面二角形をなし、平坦面は下方に傾斜をもっている。粘土紐を貼り付けた痕跡が明瞭に残っている。粘土貼り付け後、斜位の刷毛目調整を施し、上からナデ調整が加えられている。口縁端部にはヘラによる浅い刻目が施されている。口縁下の突帯は刷毛目調整後、貼り付けられている。貼り付け部のナデで刷毛目が消されている。突帯は断面形が低い三角形をなし、頂部に浅い刻目がみられる。内面はナデ調整。胎土には砂粒を多量に混入する。焼成は良好、色調は外面が黄白色で一部黒斑がある。内面は灰褐色をなす。６は口縁部が逆Ｌ字形にのび、端部は丸くおさめている。口縁平坦面はほぼ水平である。口縁下の突帯は細かく、断面形は低い三角形をなす。刻目は上下突帯共ない。下の突帯以下には横・縦方向の刷毛目調整痕がみられるが、突帯間は横方向のナデ調整によって消されている。内面は横方向のナデ調整であるが凹凸が目立つ。特に口縁直下には指押えの痕跡が顕著である。胎土には多量の砂粒が混入されているが、表面には目立たない。焼成は良好。色調は外面が黄白色で、下の突帯下に黒斑がみられる。内面は灰赤色をなす。スス等の付着はみられない。７は口縁部断面が三角形をなす。平坦面は下方に傾斜している。口縁端にはヘラによる刻みが浅く刻まれている。外面は横ナデ調整。口縁下にススが付着している。内面の調整は磨滅し不明。胎土には砂粒を混入しているが、良質、焼成は良好。内外面共白灰色をなす。口縁部の粘土貼り付けの痕跡が擬口縁状に明瞭に残っている。10も７と同様の口縁部形態をなすが、平坦面はほぼ水平である。口縁部の貼り付けは明瞭で、特に突帯の下位は粘土紐の状態がそのまま残り、剥離面は擬口縁状をなしている。端部にはヘラによる浅い刻目がつけられる。内外面共に横ナデ調整である。胎土には多量の砂粒を混入し、表面にも目立ち良質でない。焼成は良好。色調は黄白色をなす。11は口縁部が三角形に肥厚するのは同様であるが、前者とは趣を異にする。平坦面は水平で、端部の刻目はヘラによるもので、細く浅い。胎土には砂粒を多く含み、不良。焼成はやゝもろい。色調は外面が褐色、内面が灰褐色をなす。内外面共に横ナデ調整が加えられている。

壺形土器（Fig. 21－８、12）

胴部破片・底部各１点がある。８は大型の壺形土器の肩部の破片である。頭部と肩部の境に貼り付け突帯があるが、磨滅し不明瞭になっている。突帯の下には貝殻腹縁を押圧して無軸の羽状文が二段にわたって施文されている。文様帯の下には二本のヘラ描きの沈線がめぐらされている。以下は横方向のヘラ研磨が加えられるが、やゝ粗い。内面の調整は磨滅しているため不明瞭、凹凸が著しい。胎

土には褐同様に花崗岩の砂粒を多く混入し、良質でない。焼成はやゝあまい。色調は外面が黄白色～黒褐色、内面が黄白色をなす。文様帯から無文部にかけて内側からあけた二次穿孔がみられる。12は壷の底部と考えられる。全体に磨滅している。底部は円筒状に高くなり、円盤貼り付け状をなす。胴部は外に大きく張り出している。調整等は不明。胎土には多量の砂粒が混入され、質は良くない。焼成は良好。色調は内外面共に赤褐色をなす。外面の一部に黒斑がある。復原底部径8.8cm。

壺形土器の底部（Fig. 21－13～15）

特徴のある3点を図示した。13は脚台状の高い底部である。脚端部がわずかに外に張り出し、外底部はわずかにあげ底をなす。典型的な城ノ越式の底部である。内底部にはコゲつきによる炭化物が付着している。外面は二次的に火を受け変色している。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は白灰色～赤色、内面は黒褐色をなす。底部径8.6cmを測る。14は底部端が大きく外に張り出した台形状をなす。外底部はヘラ削りが加えられる。体部は直線的にたちあがり、外面には縦位の刷毛目が丁寧に施される。内面はヘラナデ調整。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は堅緻、色調は外面が白黄色～赤黄色、内面が赤黄色、内底部は指圧痕が残り、コゲつきにより黒褐色に変色している。底部径8.4cm。15は平底で体部は直線的にたちあがる。体部外面には粗い刷毛目調整痕が縦位に施される。内面は指による調整。胎土には砂粒を混入する。焼成良好、色調は外面が黄白色、内面が白灰色をなす。復原底部径8.6cm。

第3章　F－8b区の調査

1．調査区の位置（Fig. 22）

板付遺跡の集落がのる中位段丘Ⅱ面は、御笠川や古諸岡川等の自然流路の侵蝕によって、南北に細長い低台地状をなしている。この低台地は南側が高く、北に向ってゆるやかな傾斜をもっているが、現在、頂部が南と環濠集落の存在する中央部の二ヶ所にあり、現在は削平されているが、現在の板付北小学校の運動場も頂部があったと考えられる。これら頂部間は、くびれて、鞍部が形成されていて、低台地の中にあって、南台地、中央台地、北台地に分かれて、それぞれが独立したような状態になっている。

南台地と中央台地の間の鞍部には、県道（現在は環濠のすぐ北側を通る）が通り、古くから住宅が建て込んでおり、旧地形は把握しにくいが、県道の高さと台地の間には約1m～1.5mの比高差がある。県道の北側と南台地の間には小川が、台地を切断するような状況で流れ、鞍部西側において小川は二手に分かれ、一方はそのまま西流し、他の一方は北にまがり、中央台地の西側に沿って北流し、下流へと連なっている。また、鞍部の東側開口部には、三笠川や新川の増水に設えて、最近まで水流を妨げるように水門がつくられていた。この鞍部が常に水の流路となっていたことが推測される。これらを裏づけるように、中央台地西側に沿って刻目突帯文土器や板付Ⅰ式土器段階の水路が掘削され

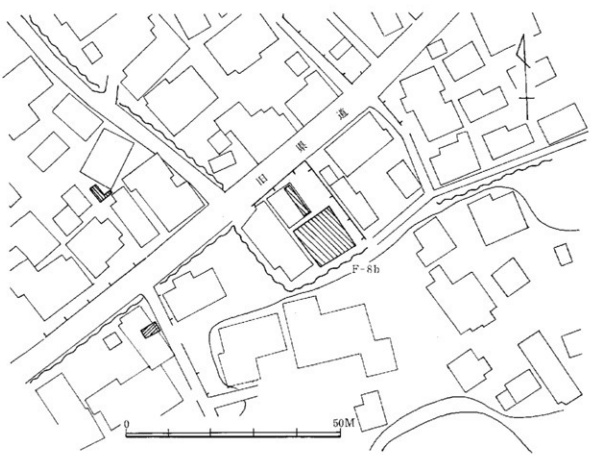


Fig. 22　F－8b区の位置

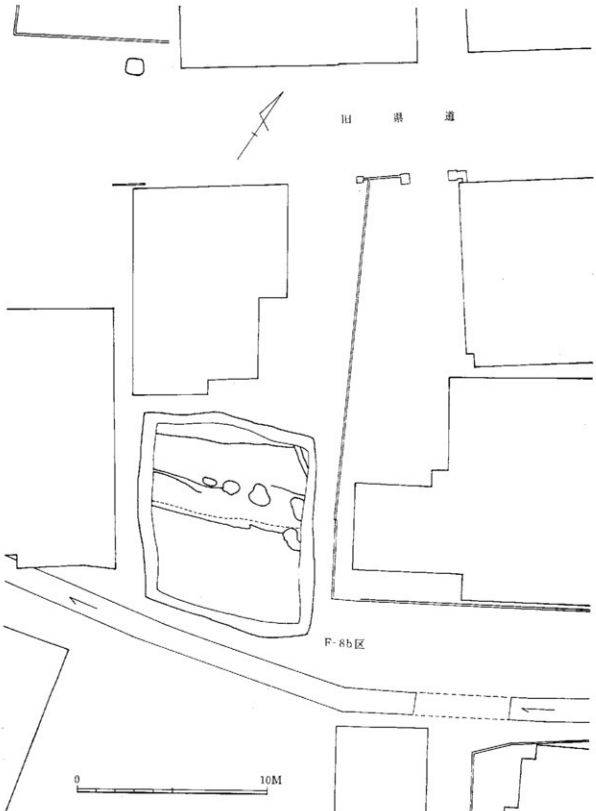


Fig. 23　F－8b区の位置と遺構

ている。この水路は鞍部の西側の開口部にあたる第64次調査区や鞍部に位置する本調査区のすぐ北側に設定された試掘調査トレンチにおいても確認されているので、これらの古い水路も、この鞍部を切

断して、堀切り状に掘削されていた可能性が強い。

本調査区は、鞍部に設定された試掘トレンチのすぐ南側に位置している。本調査区は面積がせまいため、調査区内に古い水路は確認できず、板付Ⅰ式土器段階の水路との関係は把握することはできなかったが、この水路の左岸に位置していることは疑いない。調査区からは東西にのびる浅い溝と土坑を検出したが、その性格等については充分に把握できていない。出土土器がほぼ中期後半に限られ、丹塗り土器や底部穿孔の土器が比較的多いことから祭祀に関連した遺跡とみることもできる。が一方、出土石器の中には石庖丁等の未製品（失敗品）が含まれていることを考えると、単純に祭祀遺跡とみることはできない。

遺跡の性格等については、後述するまとめの中で検討を加えることにする。

2．調査区の土層（Fig. 24）

調査区は前述したように、南台地と中央台地の間の鞍部に位置しているため低いので、宅地化された段階で盛土がおこなわれ、道路面の高さにそろえられている。

調査区の西壁の土層断面を Fig. 24に示した。第1層は宅地造成時の盛土。厚さ40cm～50cm。第2層は造成前の水田耕作土と考えられる暗青灰色の砂混りの粘土層、厚さ20cm前後であるが、調査区の北側は深くなり、40cm前後となっている。層の表面には若干の凹凸がある。第3層は水田床土かと思われる黄褐色粘土層であるが、南壁より6m前後の所に厚さ6cm、長さ80cmのレンズ状に残存しているだけである。水田床土の形成が少ないことを考えれば、あまり良い水田ではなかったと考えられる。鞍部に形成されていることや、増水時に流路となっていたことを考慮すれば、うなづけることである。第4層以下は溝の堆積土層である。第4層は溝の北側に堆積する層位で、第3層の直下に存在する。炭化物が多く含まれた黒色粘質土層である。厚さ8～10cm、長さ1.4mにわたってレンズ状に堆積している。第5層も第4層の直下に堆積する層位である。黒色の砂混じりの粘土層で厚さ2～20cmでレンズ状に堆積する。北側の大部分は地山の八女粘土層に接しており、ある時期の水路の状況を示しているものと考えられる。第6層は第5層の南側から下位にかけてのやゝ広い範囲に堆積する土層である。鉄分を含んだ褐色粗砂層である。厚さ10～30cm。幅2.2mにわたってレンズ状に堆積している。第7層は溝の大部分に堆積する層である。青灰色の微砂～粗砂層で、第8層とは区別できるが、そう時間をおかずに、むしろ同時に堆積した可能性

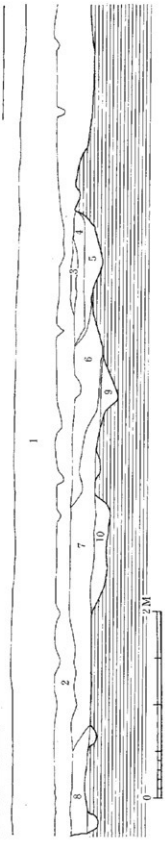


Fig. 24　F－8b区　土層断面実測図

が強い。厚さ10～26cm、北側では第6層の下位にあたるが、南側では旧表土の水田耕作土の直下に堆積している。第8層は南端部に堆積した層である。青灰色粗砂層で厚さ20cm前後、第7層同様に旧表土である水田耕作土の直下に堆積している。第4層から第8層は溝（B溝）の堆積土である。堆積状況からすれば、上部はかなり削平されている可能性が強い。弥生時代の土坑はいずれも第7、8層の下位から検出されたものである。第9層は第1号土坑の埋土である。黒色の粘質土で、厚さ20cm前後。第10層は第5号土坑の埋土である。黒色の粘質土層で、厚さ16cm前後である。南端部の落ち込みはC溝の埋土で、第1号土坑同様の黒色の粘土層である。地山は八女粘土層となっている。

調査区は浅い割に湧水がひどかったが、これは先に指摘したように、かって流路となっていたことを裏づけるものであろう。

3．遺構（Fig. 25～28）

検出した遺構は土坑5基と溝3条と不明ピット3である。溝は畝部に平行した東西溝である。土坑

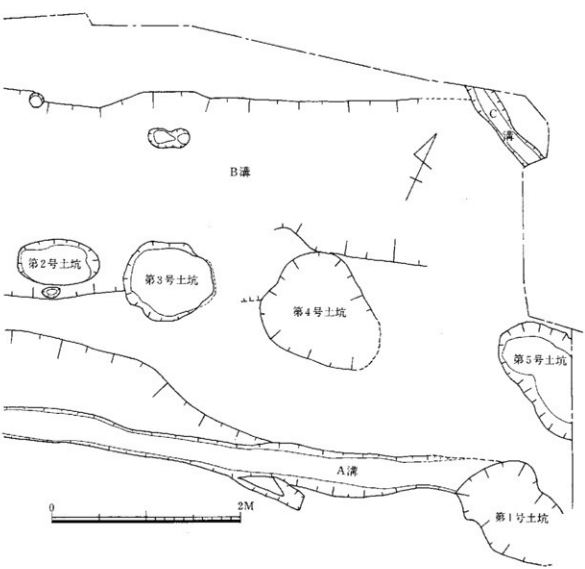


Fig. 25　F－8b区　遺構全体図

は後述するように規模等は不規則であるが、溝間のちょっとした高まりに、ほぼ一直線に4基が掘り込まれ、1号土坑が5号土坑と並列している。土坑のうち1基は古代に下るものである。この1基を除いて、他の土坑は、B溝の堆土層下に検出したもので、B溝より先行する時期に比定できるが、出土土器からすれば、時期的にへだたりがあるものではない。溝との関係や配置等からみて何らかの関連性があるものと考えられる。

以下、各遺構について詳述する。

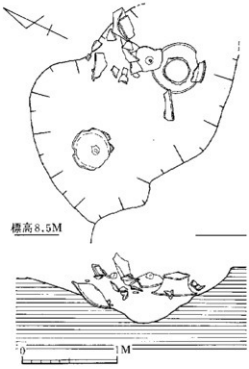


Fig. 26　第1号土坑実測図

(1)　第1号土坑（Fig. 26）

調査区の東壁中央部に検出した土坑である。一部、壁内に延びている。第5号土坑とはわずか20cm離れていて、南北に並列している。A溝と切り合い関係にあり、A溝に切られている。平面形は不整の楕円形で、一部がくびれ、ひょうたん形をなすが、一部が壁中にのびているため全形は不明。長径115＋αcm、短径80～90cm。断面形は壁が急にたちあがることなく、ゆるやかに深くなる皿状をなす。深さ26cm。中央部が最も深くなる。

遺物は壁際に集中している部とやゝ離れて高杯の杯部がある二ヶ所に分かれている。集中部の土器は壺形上器、高杯、甕形土器、器台等があるが、いずれも破片である。壺の口径部がほぼ完全に残る大きな破片もある。また、単独で存在する高杯の杯部はほぼ完全である。土器の大部分は丹塗り上器であることを考えれば、祭祀に使用された土器を破損後、投棄した土坑と考えうるが確証はない。

(2)　第2号土坑（Fig. 27）

調査区の中央部よりやゝ西に位置する土坑で、B溝の溝底に存在する。東西にならんだ土坑群の最も西端に位置している。第3号土坑とは、約30cm離れた西側に位置する。土層が湧水のため、見きわめがたく、土坑の切り込み面が確認できなかったが、出土遺物からみて、B溝の上層から掘り込まれていることがわかった。

土坑は端正な楕円形をなす。長径（東西径）85cm、短径（南北径）49cmを測る。深さは溝の壁際に近い南側で15cm、溝底側でわずかに4cmを残すのみである。壁は垂直にたちあがり、床面は平坦である。規模ややゝ小さいが、形状や後述する遺物から土坑墓であった可能性もある。

(3)　第3号土坑（Fig. 27）

調査区のほぼ中央に検出した土坑である。東西に一列に並んだ土坑群の中で西から二番目に位置している。第2号土坑とは約30cm離れ、東に位置する第4号土坑とは約50cm離れている。B溝の壁から溝底にかけて掘り込まれている。

平面形はやゝ不整形ながら円形をなす。長径（東西径）95cm、短径（南北径）84cmを測る。南北壁と西壁はかなり急な角度をもってたちあがるが、東壁はわずかではあるが袋状をなしている。床面は

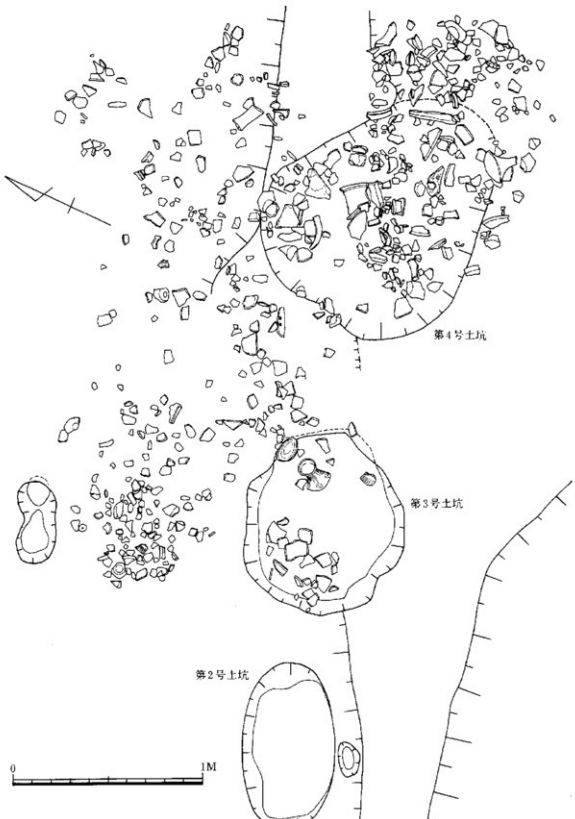


Fig. 27　F－8b区　第2～4号土坑と遺物出土状況実測図

中央部がやゝ深いが、ほぼ平坦である。

土坑内から出土する遺物は比較的多いが、大部分は埋土の上層に含まれ、床面に密着したものはない。上層に包含される遺物は土坑中央部にはなく、東側と西側に集中しているが、いずれも小破片であり、土坑外から流れ込んだような状態を示している。ただし、東側の一群には器台が、ほぼ完全な姿を保って出土している。また、土坑縁には Fig. 40－4 に図示した凹石が出土している。丹塗りされた土器が少ないことから、第1号土坑とは異なった使用が考えられる。

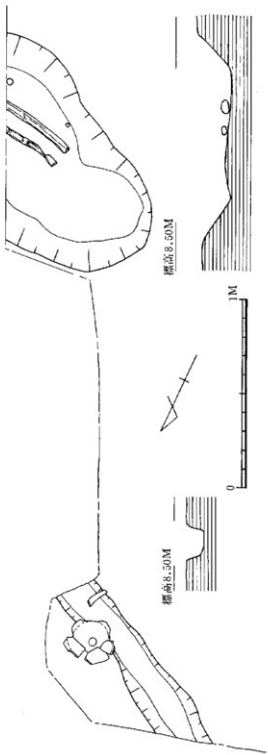


Fig. 28　F－8b区　第5号土坑と C溝実測図

(4)　第4号土坑（Fig. 27）

調査区の中央よりやゝ東に片寄って検出した土坑である。東西に一列に並んだ土坑群の中で、西から三番目に位置している。西に位置する第3号土坑とは約50cm離れ、東に位置する第5号土坑とは約150cm離れている。A溝とB溝にはさまれたやゝ高い所に掘削されているが、B溝の堆積物が上を覆っているので、時期的にはB溝に先行するものである。

平面形は、やゝいびつな円形をしている。全体に浅く、土坑の一部は明らかでない。長径（東西径）130cm、短径（南北径）115cmを測る。断面形は浅い皿状をなす。深さは最も深い所で9cmを有するにすぎない。土坑を覆うB溝の堆積土には Fig. 27にみるように土器片が多いが、土坑内には小破片があるにすぎない。丹塗り土器等は含まれていない。土坑が浅いことや遺物が小破片となっていることから、他の土坑より先行して存在した可能性がある。

(5)　第5号土坑（Fig. 28）

調査区の東端に検出した土坑である。東西に一列に並んだ土坑群の中で最も東に位置している。土坑の一部は壁中にのびていて全形は明らかでない。西に位置する第4号土坑とは約150cm離れ、南に位置する第1号土坑とは、わずかに20cm離れているにすぎない。第5号土坑は完全にB溝の溝底に存在し、B溝に先行する遺構である。

第5号土坑の平面形は、一部が壁中にのびているために明確ではないが、長楕円形をなすものと考えられる。現存で長径（東西径）約130cm、短径（南北径）約80cmを測るが、復原すると長径140cm前

後、短径70～95cm前後の長楕円形となる。壁はゆるやかな傾斜をもってたちあがり、床面は平坦である。深さは約15cmで、断面形は逆台形状をなす。坑底には壁との接点付近に杭２本が打ち込まれている。杭はそれぞれ35cm離れている。杭と土坑の関係は明らかでないが、土坑の性格を考える上で重要である。

遺物は少なく、坑底に二本の杭材が、土坑の長軸に平行して存在するにすぎない。南側の材は径５cm、長さ43cm以上。北側の材は径３cm、長さ34cm以上。材の間は７cm離れているだけで平行している。坑はこれらの材をとめるために打ち込まれた可能性がある。護岸用のものか。

(6) A溝（Fig. 25）

調査区のほぼ中央を東西に横切る。地山面で確認した溝幅は約30cm、長さ約８mである。しかし、これは発掘区が湧水によって判別困難で、この溝の切り込み面を確認できなかったため、はっきりと遺構を確認した地山面の数値で、実際はこれより幅広い。東側壁の土層観察からは、溝幅は約1.4m、深さ約30cm、断面形が浅いじ字形をなすことがわかる。第１号土坑とは直接切り合い関係にあり、A溝が第１号土坑を切っている。また、B溝とも切り合い関係にあり、B溝が完全に埋没した後にA溝が掘削されていることがわかる。A溝の埋土からは、直接、時期を示す遺物は出土していないため、時期比定は困難である。B溝が完全に埋ってから掘り込まれていることからすれば、同様に埋土上面から切り込まれた、第２号土坑と近い時期に比定することが可能である。

(7) B溝（Fig. 25）

調査区の中央部から北半部にかけて検出した溝である。A溝にほぼ平行した溝である。溝幅は2.2m～3.8m、深さ30cm前後と浅い。溝底は平坦であるが、途中で川幅に変化があるので、数回の流路の変動があったと考えられる。長さは調査区の東から西にかけての約８mを確認し、両方向共に調査区外にのびている。溝内の堆積土の状態に先に示したとおりである。第１号～第５号土坑、A溝、C溝と直接の切り合い関係があり、第１号土坑、第３号～第５号土坑、C溝を切り、A溝、第２号土坑によって切られている。

B溝の埋土中には、弥生時代中期後半を主体とした多量の弥生土器、石斧、石庖丁、石鏃等の石器、未製品（失敗品）が包含されている。なお、旧石器時代のナイフ形石器や剥片が混入していることを考えれば、周辺に旧石器時代の包含層が存在した可能性がある。

なお、A溝、B溝共に東から西に向って流れていたと考えられ、弥生時代前期の水路や近・現代の水路との関連性が考えられる。

(8) C溝（Fig. 28）

調査区の北東隅に検出した小さな溝である。B溝と切り合い関係にあり、B溝に切られている。埋土の状態や埋土層からすれば、第１号土坑と近い時期の遺構と考えることができる。溝幅20～25cm、深さ約10cm、断面形が逆台形状をした小規模な溝である。溝の方向は南東から北西に向っており、A溝やB溝とは異なり、直交するような状態にある。溝の規模や方向からみて、A・B溝のような比較的大きな溝から引き込まれた支線水路的な役割を果しているものと考えられる。長さ約1.1mを検出したが、両端共にさらに延びている。この溝に伴う遺物として肩部から、弥生土器の高杯形土器と甕の破片が出土している。高杯の杯部はほぼ完形である。

4．出土遺物

本調査区から出土した主な遺物は弥生土器、石器であり、一部、木材等の自然遺物がある。遺構ごとに出土遺物の説明を加えるが、石器、土製品についてはまとめて説明する。なお、石器の中には後期旧石器時代のナイフ形石器や使用痕ある剥片も含まれている。本調査区内で包含層等は確認できなかったが、本調査区周辺に、同時代の遺物包含層が存在する可能性は高い。第1章3に示した板付遺跡出土の旧石器を参照されたい。

(1) 第1号土坑出土遺物（Fig. 29）

第1号土坑から出土した遺物は弥生土器と木材片等の自然遺物があるが、木材等はいずれも流木であるので、弥生土器のみを示す。弥生土器には甕形土器、高杯形土器、壷形土器、器台等がある。なお、高杯形土器の杯部の完形品の所在が不明なため割愛した。実測図はFig. 29に示した。

1～7は甕形土器の口縁部である。3を除いて、いずれも逆L字形の口縁形態をしている。1は

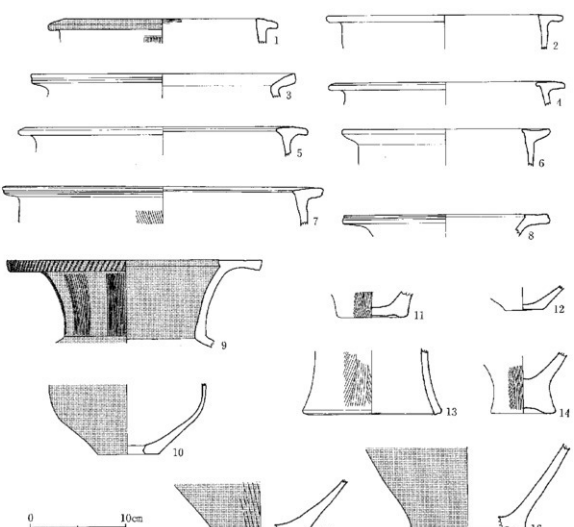


Fig. 29　第1号土坑出土遺物実測図

復原口径25.4cm、口縁部の平坦面は下方に傾斜し、張り出しは小さい。外面は縦方向の刷毛目調整。口縁部から内面にかけては横ナデ調整。胎土には砂粒を含む。焼成は良く、白黄色をなす。口縁端に丹塗りの痕跡が残っている。2は口縁平坦部はやゝ外に張り出す。復原口径25.2cm。口縁下に強い横ナデが加えられ、やゝ凹む。全体は丁寧な横ナデ調整。外面にススの付着が顕著である。胎土、焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が黄白色をなす。3はくの字形口縁を有する。口縁端部はやゝ肥厚し、端部に凹線一条がめぐる。口縁部内面は横方向の刷毛目調整後、横ナデ調整が加えられる。胎土には若干の砂粒を混入、焼成は良好。色調は内外面共黄赤色で、口縁の一部に黒斑がみられる。復原口径28.2cm。4は口縁内側に若干の張り出しがみられ、指による調整が加えられている。全体は横ナデ調整。胎土には砂粒を混入する。焼成は良好、赤褐色をなす。復原口径25.2cmを測る。5は復原口径30.4cm、口縁部内側の張り出しも大きく、外の張り出しも長く、全体にT字形口縁に近い。口縁端部は丸くおさめている。口縁部から外面にかけてススの付着が顕著である。全面は丁寧な横ナデ調整。胎土、焼成は良好で、色調は外面がススのため黒色、内面は黄褐色をなす。6は復原口径22.0cm、口縁平坦面は横ナデによって中央部は凹む。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。内側の張り出しは小さい。全体は横ナデ調整。胎土には細かい砂粒が混入されるが良質。焼成は良好。色調は内外面共に黄褐色をなす。7は復原口径33.8cm、口縁部の張り出しは大きく、端部に凹線一条がめぐる。内側は小さく張り出す。口縁平坦面はやゝ上方に傾斜する。外面の口頸部から内側は横ナデ調整、外面に縦方向の刷毛目調整。胎土には多量の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は内外面共赤褐色をなし、口縁部から胴部にかけて黒斑がみられる。

8は高杯形土器の杯部破片である。復原口径22.0cm、口縁部は外に大きく張り出す。口縁端部には凹線一条をめぐらす。全面にわたって横ナデ調整が加えられる。外面にススが付着している。胎土には細かい砂粒を混入しているが良質。焼成は良好で、色調は内外面共に白黄色をなす。

9、10は壺形土器である。9は頸部より上部は完全に残っている。口径26.8cm。頸部径14.8cmを測る。口縁部は鋤形口縁をなすが、内側の張り出しは少ない。口縁端部はわずかに肥厚し、平坦に仕上げている。浅い凹線一条をめぐらし、ヘラによる細かい斜の刻目を施す。また、頸部には2.0cm幅の間隔で縦位のヘラ研磨による暗文が施されている。内外面共に丹を厚く塗り研磨を加えている。胎土は精製され良質、焼成は良好、丹塗りの下地は白黄色をなす。10は底部から胴下半にかけての破片である。底部径6.4cm、底部には焼成後、外底部から打撃を加えて穿孔されている。孔径約2.7cm。割れ口は後から研磨が加えられている。外底部にも研磨が加えられ、焼成時の面は残っていない。体部は底部から大きく外傾しながらたちあがる。胴部最大径16.4cm、無頸壷の底部と考えられる。胴外面は丹塗り磨研であるが、磨滅し残存状態は良くない。内底部には指による調整がみられ、指圧痕が残っている。また、内底部の数ヶ所に丹が斑点状に残っている。

13は器台の破片と考えられる。復原底部径14.8cm、底部端は平坦に仕上げ、凹線一条がめぐる。外面にはやゝ目の太い縦位の刷毛目調整が施され、下端の約2cmの範囲に横ナデ調整が加えられている。内面は凹凸があるが下半には横ナデ調整が加えられている。胎土には少量の砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が黄灰色、内面が赤黄色をなす。

11、12、14～16は底部破片である。11は底部径7.6cm、やゝあげ底状をなし、外縁は約1cmの幅でリング状になっている。外面には縦位の丁寧な刷毛目調整が施されている。胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好、色調は内外面共に黄褐色をなす。甕形土器の底部である。12は壺形土器の底部である。底部径4.0cm、体部は外傾しながらたちあがる。全体に磨滅し、調整痕等は明らかにできないが、胎土等からみて丹塗り土器とみられる。胎土は良質で白色をなす。焼成良好。14は甕形土器の底部で

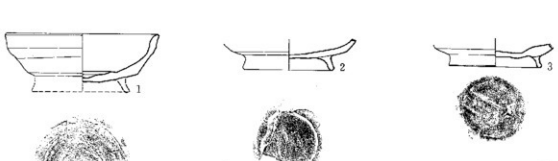


Fig. 30　第２号土坑出土遺物実測図

ある。底部径6.8cmで、中央部がくぼみ、あげ底状をなす。底部は厚く、中期初頭の特徴をもっている。本調査区では最も古い土器として位置づけられる。外面には縦位～斜位のやゝ粗い刷毛目調整が施される。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成は良い。色調は外面が黄灰色、内面が黒褐色をなす。15、16は壷形土器の底部破片である。15は復原底部9.6cm。やゝあげ底状をなす。体部は外傾しながら外にひらきたちあがる。外底部と内面は不定方向のヘラ研磨、体部外面は縦位のヘラ研磨調整。胎土には若干の砂粒を含むが良質、焼成は堅緻で、色調は外面が灰色、内面が黄灰色をなす。16は復原底部径12.0cm。あげ底状をなし、底部外縁部はリング状をなす。体部はあまりふくらみをもたずにたちあがる。内外面共にヘラ研磨調整であるが方向等は不明。胎土は精製され良質。焼成は堅緻、色調は外面が黄赤色、内面は白灰色をなす。15、16共に元来は丹塗り土器である。

(2)　第２号土坑出土遺物（Fig. 30）

本土坑の出土遺物は少ない。流れ込みと考えられる若干の弥生土器小片、土師器の杯４点がある。土師器は Fig. 30に図示した。

１～４共に類似した器形を有している。１は杯部で、高台を失う。底部は丸底で高台よりわずかにでたところで屈曲し、体部は丸味をもってたちあがる。口縁部はわずかに肥厚し、端部は丸くおさめる。口縁部の直下には沈線状の段ができる。内底部に粘土の接合部渦巻状に残っている。体部内外面は横ナデ調整。内底部は不定方向のナデ調整で、外底部はヘラおこしであるが、一部に板目圧痕がみられる。高台の貼り付け部が輪状に残っている。他同様のやゝ外に張った高い高台がつくものと考えられる。口縁部径7.3cm、復原高4.8cm。２も同様の杯である。杯部上半を失う。内底部は中央部がやゝ凹むが、全体に平坦で、不定方向のヘラ研磨が加えられている。体部外面は横ナデ調整、外底部はヘラおこしで、中央部に平行した板目圧痕がみられる。高台は貼り付けで、やゝ高い。高台内側の貼り付け部分。そのまま放置されているので、段が残っている。高台端部は丸くおさめる。高台径7.3cmを測る。３も同様の底部破片である。内底部は大きく凹み、粘土の接合部が渦巻状に残り、上からナデが加えられている。体部は横ナデ調整。外底部はヘラおこしで、中央部には平行線状に板目圧痕が残っている。上から不定方向のヘラ研磨が粗くつけられている。貼り付け高台は前者同様である。高台径7.5cmを測る。４は同様の底部破片。全体に若干磨滅し、調整等は不明。高台復原径は7.3cmである。

(3) 第３号土坑出土遺物（Fig. 31）

本土坑から出土した遺物は、いずれも弥生土器である。弥生土器の器種には甕形土器、壷形土器、器台等がある。なお、本土坑の縁より出土した凹石については、石器で詳述する。

１～４は甕形土器の口縁部である。いずれも、逆Ｌ字形の口縁をもつ。１は口縁が強く外に張り、内側にはわずかに突帯する。内外面共横ナデ調整。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好。色調は内外面共に赤黄色をなす。復原口径30.4cm、２は復原口径30.0cm。口縁の平坦部がやゝ上方に傾斜する。外面に縦方向に刷毛目調整、他は横ナデ調整である。口縁内側の張り出しは小さい。胎土には砂粒を混入している。焼成は堅緻。色調は内外面共に灰褐色をなす。３は復原口径28.8cm。口縁部の平坦面はゆるやかな丸味をもち、内側の張り出しも強い。口縁端部は平坦面をつくり、凹線一条がめぐらされる。内外面共に横ナデ調整で、丹塗りされているが、磨滅しているため丹はほとんど落ちている。胎土には砂粒を多く混入している。焼成は良好。色調は内外面共に黄赤色をなす。４は復原口径28.2cm。全体に薄手の土器である。口縁部の平坦面は丸味をもって外に張り出し、内側も良く張り出している。内外面共に横ナデ調整。土器の表面にスリップがかけられている。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は内外面共に赤褐色をなす。

５、６は丹塗りの壷形土器、５は無頸壷の口縁部とみられる。口縁は小さな逆Ｌ字形をなし、端部は丸くおさめている。内側は中に大きく張り出している。復原口径18.4cm、やゝ磨滅しているが、内外面共に横ナデ調整で、外面は丹塗りされている。胴部はあまり張らない。胎土は精製され良質、焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面は白黄色をなす。６は鍬形口縁をもった壷形土器の口縁部である。復原口径20.4cm、全体に薄く小型品である。口縁平坦面は内外に良く張り出し、端部は丸くお

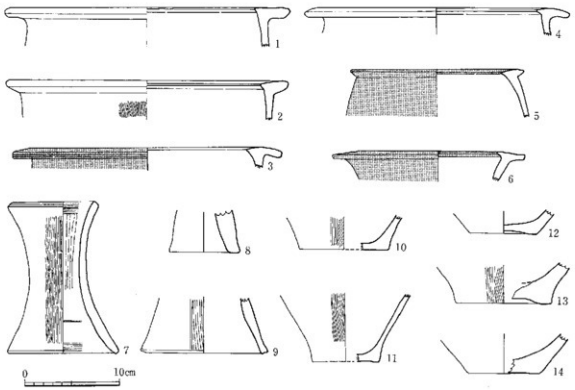


Fig. 31　第３号土坑出土遺物実測図

さめている。調整等については土器の保存状態が悪く不明。胎土は精製され良質、外側には白色粘土のスリップがかけられ、その上に丹が塗られている。焼成は良好。色調は内外面共に白黄色をなす。

7～9は筒形の器台。7はほぼ全形をたもっている。口径9.6cm、底径11.6cm、器高16.0cmを測る。口縁端部、底部端部共に平坦で、一条の凹線をめぐらしている。外面には縦方向の刷毛目調整を丁寧に施している。上下共に約2cmの間隔は横ナデ調整を加えている。内面は指押え等の調整が加わり、凹凸が著しい。口縁と底部内側には横方向の刷毛目調整が加えられる。底部付近は二次的な加熱によって赤色に変色している。胎土には若干の砂粒を混入するが良質。焼成は堅緻。色調は内外面共に灰黄色をなす。9も同様の器台。復原底径13.6cm、外面には縦位の刷毛目調整を施す。胎土、焼成は良好。色調は内外面共に黄赤色をなす。8は粗製の器台。全体に厚手のつくりである。復原底部径7.6cm、底部端は平坦である。底部付近は二次的加熱のため赤く変色している。胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好。色調は内外面共に灰褐色をなす。

10～14は底部破片である。10、11、13が壺形土器、12、14が壷形土器の底部と考えられる。10は復原底径9.6cm、外面は縦位の刷毛目調整。内底部にコゲつきがみられ、外面は二次的加熱のため赤く変色している。胎土には砂粒を多く混入している。焼成は良く、色調は外面が赤黄色、内面が黄褐色をなす。11は復原底部径7.2cm、外面には斜位の刷毛目調整が施される。内面は指圧痕が顕著である。二次加熱のため赤く変色している。胎土は精製され良質、焼成は良好。色調は外面が赤黄色、内面が白黄色～灰色をなす。12は復原底部径7.2cm、体部は丸味をもってたちあがる。胎土には多量の砂粒が混入され不良、焼成は良い。色調は外面が黒斑のため黒色、内面は黄白色をなす。13は復原底径10.4cm。やゝあげ底状をなす。外面には粗い縦の刷毛目調整を施す。14は復原底径7.6cm、13、14共に二次的加熱によって赤く変色している。胎土には砂を混入する。焼成は良好。色調は13が内外面共に赤褐色、14が外面が桃色、内面が白黄色をなす。

(4) 第4号土坑出土遺物

本土坑からは弥生土器片と石器1点が出土している。弥生土器の大部分は胴部破片で器形のわかるものはない。口縁部、底部でかろうじて器形の判明するものは、甕形土器、高杯形土器、壷形土器がある。点数も少なく図化できるものはない。石器は叩石として使用されたもので、円礫の周囲に敲打痕が残っている。両端部が欠けている。

(5) B溝出土弥生土器（Fig. 32～39）

B溝から出土した弥生土器は多量で、溝中に投棄あるいは流れ込んだ状況であった。出土土器中には、挿図に示したように丹塗りされた土器も多量に含まれている。器種としては無頸壷、鉢形口縁や袋状口縁をもった壺、広口壺等の壺形土器、高杯形土器、椀形土器、鉢形土器、器台形土器、甕形土器等がある。出土層位によって時期が異なることはないので、一括して説明を加える。

Fig. 32－1～5は無頸壷の口縁部破片である。口縁は逆L字形に外に曲がり、端部は丸くおさめている。体部は大きく外に張り出す。1は口縁部は平坦で、復原口径17.0cm、2は口縁がやゝ上向きで、端部は尖り気味におさめている。蓋付けの孔があけられる。復原口径14.9cm、胴部最大径18.6cm。3は口縁が上向きに傾斜し、内側にわずかに張り出す。復原口径18.2cm、他よりやゝ大型である。口縁に蓋を結びつける孔が二孔があけられる。4は復原口径18.0cm。5は口縁部がやゝ上向きにあがる。4、5共に体部は末広がりに下る。1～5は共に、胎土には細かい砂粒を混入しているが、精選され良質、焼成は良好で、色調は黄白色～赤白色である。口縁部から外面は丹塗りであるが、大部分は剥

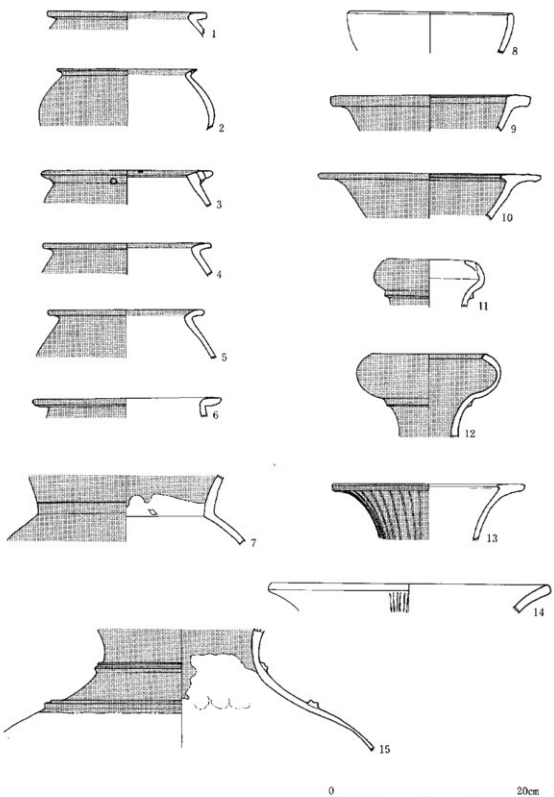


Fig. 32　B溝出土土器実測図 I

落している。6は口縁部が強く屈曲し、端部は丸くおさめている。口縁外面は丸味をもち、体部は下方にのびる。上記とは若干、器形を異にするものであろうか。胎土、焼成は他と同一。丹塗りが厚く残っている。復原口径20.0cm。7は広口壺の頸部破片である。頸部は強く屈曲し、内側に稜線ができる。頸部は垂直に近い角度でたちあがり、ゆるやかに開く。頸部復原径18.6cm。胴部は大きく外に張り出す。頸部上半から外面は丹塗りされる。頸部外面に縦方向のヘラ研磨が暗文風に入れられているが明瞭でない。胎土は精製され良質、焼成は良く、丹塗りの下地は黄赤色をなす。8は椀形土器、復原口径16.7cm。口縁端部は丸くおさめる。胎土は良質、焼成は良い。色調は内外面共に黄赤色をなす。下半に沈線四条前後がめぐらされ文様としているようであるが、明瞭でない。9、10は高杯形土器の杯部破片。9は口縁は逆L字形に折れるが、あまりのびない。復原口径21.4cm。全体に黒色顔料が塗られている。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好。色調は白灰色～白黄色をなす。10は復原口径23.6cm。鍛形口縁をなし、端部に凹線一条をめぐらす。全面丹塗りされているが、保存状態が悪く、丹が残っているところは少ない。胎土は精製され良質、焼成は良好、黄褐色をなす。11、12は袋状口縁をもつ長頸壺である。共に同形で袋状口縁の直下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。11は復原口径8.0cm、12は11.8cmで、大きさに違いがある。共に丹塗り土器であるが、11は内側に丹塗りはなく、12は現存する全面に丹塗りが認められる。胎土には砂粒を混入しているが良質、焼成は良好、色調は丹塗りの下地で11が黄白色、12が黄赤色をなす。13は鍛形口縁をもつ壺形土器、口縁端部に凹線一条をめぐらす。口縁から外面にかけて黒色顔料が塗られている。頸部外面に縦方向のヘラ研磨を加え、暗文としている。復原口径20.4cm。胎土には砂粒を混入するが良質、焼成は良好で、黄褐色をなす。14は広口壺の口縁部破片。口縁端部に凹線一条をめぐらす。外面に縦のヘラ研磨を加え暗文とし、等間隔でめぐらす。復原口径30.0cm。胎土には砂粒を混入する。焼成は良好。色調は赤褐色をなす。15は壺形土器の頸部から胴部にかけての破片である。復原頸部径16.4cm。胴上半部にM字突帯二条をめぐらす。頸部内側の上半から、外面の下の突帯より上に丹塗りが施される。胎土には砂粒が混入される。焼成良好、色調は黄褐色をなす。

Fig. 33－1～3は鍛形口縁をもつ壺形土器である。口縁端部に凹線一条をめぐらす。1はやゝ薄手で、半坦面に凹凸がある。復原口径35.4cm、2は復原口径33.2cm、3は復原口径30.0cmを測る。共に胎土に砂粒を混入する。焼成は良好、色調は1、2が赤褐色、3が黄白色をなす。4～7は広口壺の口縁部破片。口縁は大きく外反する。4、6は口唇部に凹線一条をめぐらし、端部上方がやゝふくらむ。4～6は内外面が丹塗り、7は外面のみが丹塗りである。4は復原口径31.0cm、頸部復原径16.6cm。5は口縁端部を丸くおさめる。復原口径31.0cm。6は復原口径35.2cm。5、6は頸部外面に縦のヘラ研磨を暗文風に施すが、間隔等については不明。7は口唇部に大きな凹線一条をめぐらし、凹線の上半に四条からなるカキ目を施す。いずれも胎土は砂粒を含むが良質。焼成は良好。下地の色調は赤黄色～白黄色。8はT字形口縁の甕形土器。胴部は大きく外に張り、口縁下にM字突帯一条をめぐらす。外面は丹塗りである。復原口径29.0cm。胎土は精製され良質、焼成良好、黄赤色をなす。9は高坏脚部端の破片。脚端部は肥厚し、丸くおさめる。肥厚部に段がつく。内外面共に丹塗り。復原脚端径31.2cm。胎土、焼成は良好、白黄色をなす。10、11は小型の壺形土器。口縁は短かい逆L字形をなす。10は復原口径14.2cm。11は18.2cmを測る。共に胎土には砂粒を含む。焼成は良好。10は赤褐色、11は黄白色をなす。12～14は高杯形土器の杯部破片。12、13は鍛形口縁。共に端部は丸くおさめる。14は逆L字形口縁で、口縁端がさがる。12、13は全面丹塗りである。復原口径は12が19.6cm、13が25.6cm、14が26.4cmを測る。胎土は12、13が精製され良質、14は砂粒を含む。焼成は良好。12、13は白黄色、14は黄赤色で口縁部に黒斑がある。15～17は壺形土器の頸部～胴部破片。15、16は頸部

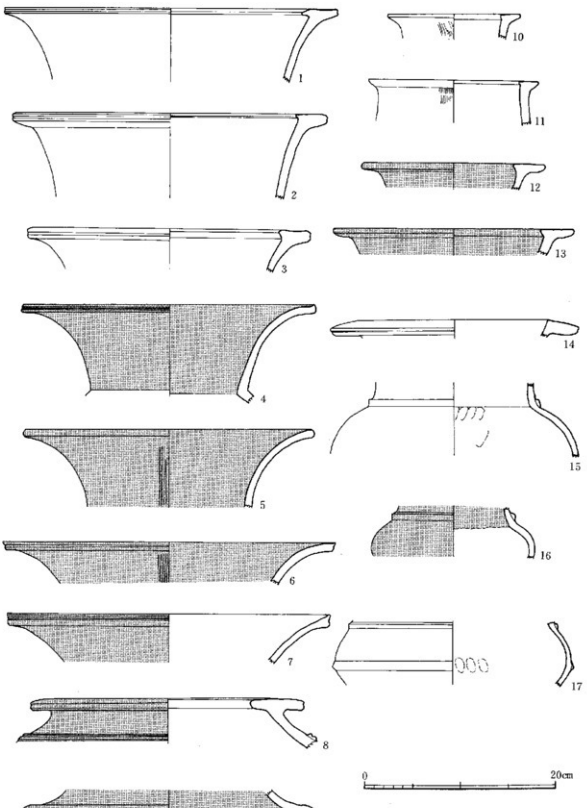


Fig. 33　B溝出土土器実測図Ⅱ

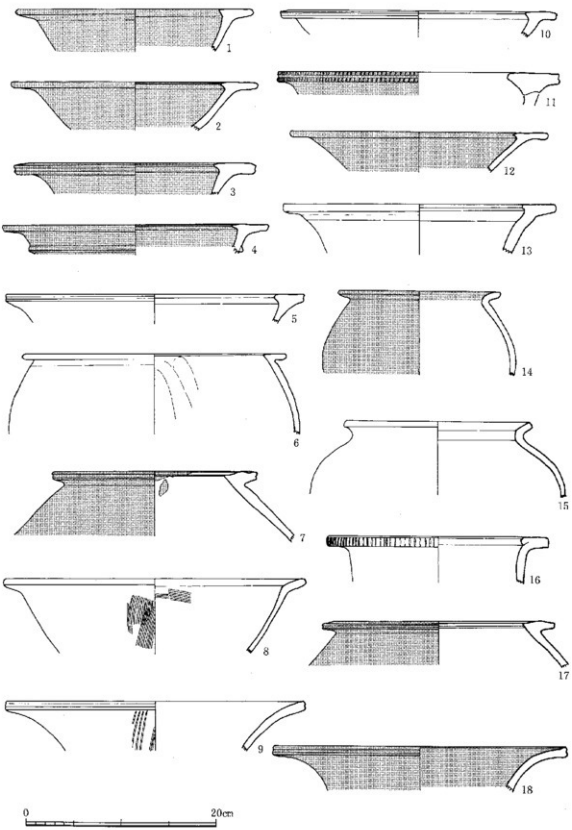


Fig. 34　B溝出土土器実測図Ⅲ

に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。復原頸部径は15が18.2cm、15が13.2cm。16は頸部内面から外面にかけて丹塗りされる。17は胴部最大径25.6cm、胴部と頸部に断面三角形の突帯二条をめぐらす。胎土に共に砂粒を混入するが良質、焼成は良好、色調は15が黄白色、16が黄赤色、17が外面が黒褐色、内面が黒色をなす。

Fig. 34－1～5、10～12は高杯形土器の杯部破片。いずれも鋤形口縁を有する。1、2、4、12は口縁端部を丸くおさめ、3、5、10は口縁端部に凹線一条をめぐらす。11は口縁端部に凹線一条をめぐらした上にヘラで刻目を入れる。5、10を除いて他は内外面共に丹塗りである。復原口径は1が15.2cm、2が26.3cm、3が25.6cm、4が28.2cm、5が31.8cm、10が29.6cm、11が30.1cm、12が27.6cmを測る。4は口縁直下にM字形突帯一条をめぐらすが、突帯は中央部で割れ、三角形状をしている。また、11は甕形土器である可能性があり、体部がないため判然としない。いずれも胎土には砂粒を混入しているが良質、焼成は良好、色調は白黄色～黄赤色をなす。なお、11の口縁接合は2cm間隔で凹凸がつけられ、密着する表面積を広くしている。13は鋤形口縁をもった壺形土器の口縁部である。頸部は磨滅して不明であるが、凹線一条がめぐる可能性が強い。口縁内側の張り出しの直下は強いナデによって帯状に凹む。復原口径29.2cm。胎土に砂粒を混入する。焼成は良好。色調は内外面共に褐色をなす。6、14、15は無頸壺である。器形はそれぞれ微妙に異なる。6は口縁部が強く屈曲し、平坦になる。頸部外面には強いナデが施される。復原口径28.0cm、14、15は口縁部がくの字になり、口縁はやゝ上方にあがっている。14は口縁端を丸くおさめ、15は平坦になる。復原口径は14が17.2cm、15が20.0cm、14は口縁から外面にかけて丹塗りされる。胎土は6にやゝ多量の砂粒が混入されるが、他は良質、焼成は良好で、色調は6が赤褐色、14が黄赤色、15が黒褐色から黒色である。7、17は逆L字形の口縁で、体部が大きく外に張る甕形土器である。口縁頸部に凹線一条がめぐる。口縁部から外面にかけて丹塗りされている。同形の土器で良く似ている。復原口径は7が30.0cm、17が24.6cm。胎土は精良、焼成は良好、黄赤色をなす。8は鉢形土器、口縁が屈曲し、大きく外反する。端部は丸くおさめる。外面は縦方向の刷毛目調整。復原口径32.0cm、胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好で赤褐色をなす。9、18は広口壺、口縁は大きく外反し、端部に凹線一条をめぐらす。9は外面にヘラによる縦の暗文が入れられる。18は内外面共に丹塗りである。復原口径は9が31.8cm、18が31.6cm。胎土は共に精製され良質。焼成は良好。色調は黄赤色をなす。16は鋤形口縁、口縁端部は平坦で、ヘラによる刻みが施される。頸部外面は縦の刷毛目調整後、横ナデ調整を加えている。復原口径23.8cm。胎土には砂粒を多く含んでいる。焼成は良好。赤褐色をなす。

Fig. 35は甕形土器である。口縁部は逆L字形からT字形に近いものまである。1は比較的薄い。外面は縦方向の刷毛目調整。ススが付着する。復原口径31.2cm。2は外面が縦方の刷毛目調整。復原口径29.4cm。3は内外面共横ナデ調整。口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。外面にススが付着する。復原口径30.6cm。4は鉢状になる。内外面共横ナデ調整。口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。復原口径31.6cm。5は内外面共横ナデ調整。復原口径32.8cm。6は口縁部が短く屈曲し丸くおさめる。外面は縦方向の刷毛目調整。外面にススが付着する。復原口径26.6cm。7は口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。外面には細かい刷毛目調整を縦位に施す。復原口径35.4cm。8は内外面共横ナデ調整。口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。外面にススの付着がみられる。復原口径40.0cm。9は胴部が大きく張る。口縁下に断面三角形の突帯一条をめぐらす。外面は丹塗りである。復原口径37.0cm。10は全体に磨滅し、調整痕等は不明。復原口径24.0cm。11は内外面共横ナデ調整。復原口径27.8cm。12も内外面共に横ナデ調整。復原口径27.8cm。13は口縁内側が張り出す。内外面共横ナデ調整、外面の一部にススが付着する。復原口径28.0cm。14

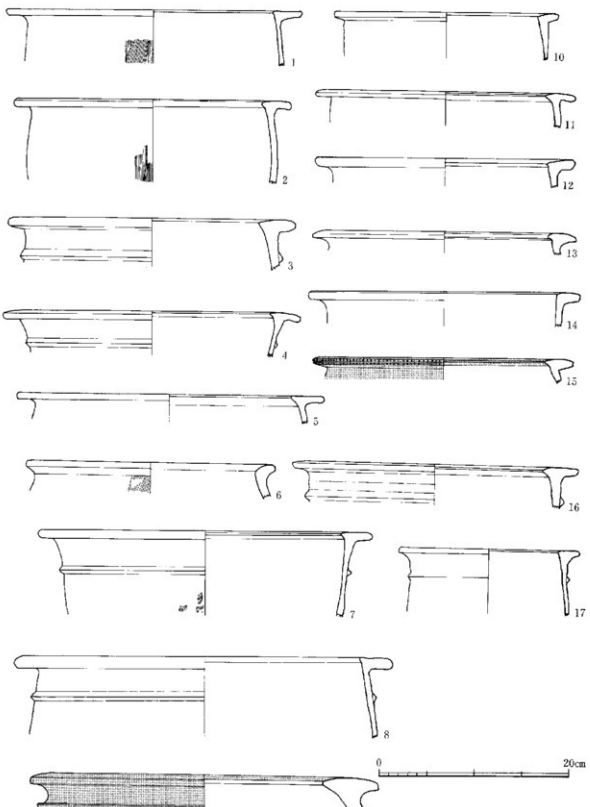


Fig. 35　B溝出土土器実測図Ⅳ

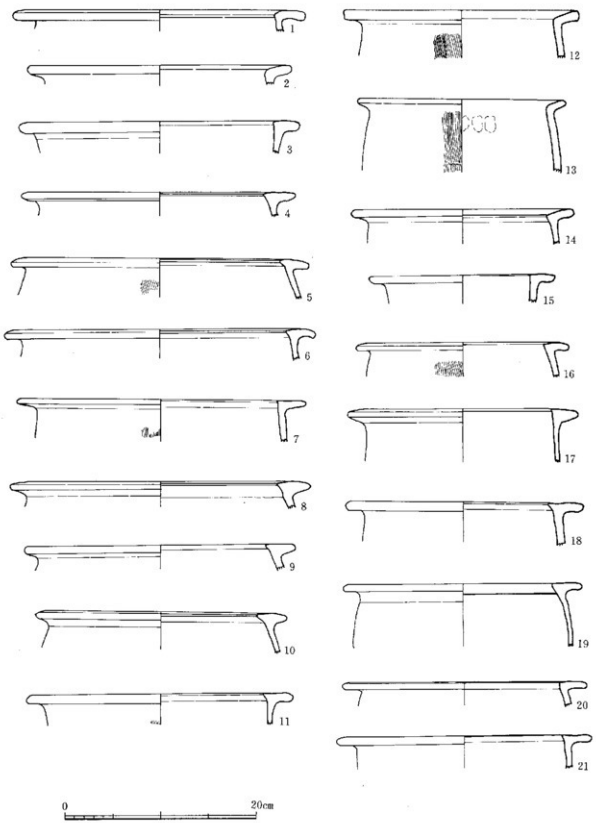


Fig. 36　B溝出土土器実測図V

は内外面共横ナデ調整。復原口径29.0cm。15は口縁端部に凹線一条をめぐらし、上からヘラで刻目を入れる。外面に厚く丹塗りが施される。復原口径27.8cm。16は口縁下に断面三角形の突帯一条をめぐらす。内外面共横ナデ調整である。復原口径30.2cm。17は口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。内外面共横ナデ調整で外面に黒色顔料を塗っている。復原口径19.4cm。胎土は3、15が精製され良質。1、7、10、16、17は砂粒を含むが良質、他は胎土に多量の砂粒を含んでいる。焼成はすべて良好である。

Fig. 36も同様の甕形土器であるが、一部にくの字形口縁を有するものもある。1は口縁端部が肥厚し、端部は丸くおさめる。口縁部内側の稜線は不明瞭。内外面共の横ナデ調整である。復原口径31.0cm。2もほぼ同様の形状をなす。復原口径28.0cm。3は口縁部がやゝ短く、端部は肥厚気味に丸くおさめる。内外面共横ナデ調整。外面にススが付着する。復原口径29.8cm。4は内外面共横ナデ調整。復原口径29.2cm。5は外面に縦位の刷毛目調整が加えられた後、内外面に横ナデ調整が加えられているので、刷毛痕は不明瞭になっている。復原口径31.4cm。6は薄手の土器である。口縁部平坦面に口縁に平行して粗い刷毛調整が施される。他は横ナデ調整である。外面の一部にススの付着がみられる。復原口径32.8cm。7は磨滅が著しく、内外面の調整は不明。復原口径30.8cm。8は内外面共横ナデ調整。復原口径31.8cm。9は内外面共に横ナデ調整。外面に一部ススが付着する。復原口径28.4cm。10は外面に縦方向の刷毛目調整が加えられるが不明瞭、口縁部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径26.8cm。11も外面は縦方向の刷毛目調整であるが不明瞭。他は横ナデ調整。外面の一部にススが付着する。復原口径28.2cm。12が口縁端部が平坦に仕上げられる。外面には縦方向の刷毛目調整を施す。口縁部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径25.0cm。13は口縁部がくの字形に屈曲する。内面の稜線は不明瞭。外面はやゝ粗い縦の刷毛目調整。内面に指圧痕が残る。復原口径22.2cm。14は内外面共横ナデ調整であるが、一部剥落している。復原口径23.8cm。15は表面が磨滅し、調整等は不明。復原口径19.8cm。16は外面に縦のやゝ粗い刷毛目調整。口縁部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径22.6cm。17は胴部器壁が薄い。外面には縦方向の刷毛目調整を加えるが、不明瞭、外にススが付着している。口縁部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径24.6cm。18は内外面共横ナデ調整。復原口径27.0cm。19は胴部がやゝふくらむ。表面がやゝ磨滅し調整痕は不明。復原口径25.4cm。20は内外面共横ナデ調整。復原口径26.0cm。21は内外面共横ナデ調整。復原口径25.6cmを測る。胎土は4、6、18、19は良質、1～3、8、9、11、14～17、20は砂粒を混入しているが良質、他は多量に砂粒を混入している。焼成は良好。

Fig. 37の1～9は同様の甕形土器である。口縁下に断面三角形の突帯一条をめぐらす。1は突帯下に縦位の刷毛目調整が施されるが不明瞭。突帯から内面にかけては横ナデ調整。復原口径42.4cm。2は内外面共横ナデ調整。復原口径39.0cm。3、4、5も同様に横ナデ調整。復原口径は3が15.8cm、4が39.2cm、5が36.4cm。6～9は胴部が張らない。6、7は表面が磨滅し、調整等不明。8、9は内外面共に横ナデ調整である。復原口径は6が37.8cm、7が35.2cm、8が34.8cm、9が37.4を測る。共に胎土には砂粒を含むが良質。焼成は良好である。10、11は椀形品である。10は口縁端部を丸くおさめる。口縁部から内面にかけては横方向のナデ調整。外面下半は縦方向のナデ調整である。胎土には砂粒を含んでいるが精選され良質、焼成は堅緻、色調は内外面共に黄灰色をなす。復原口径13.0cm。11は同様の椀形土器である。口縁部は平坦に仕上げる。内外面共に丹塗り磨研である。胎土は良質、焼成は良好、胎土にはスリップをかけ、その上に丹が塗られている。復原口径14.0cm。12は壺形土器の口縁部である。口縁はくの字に屈曲し、口縁端部は上方につまみあげられる。内外面は横ナデ調整。内外面共厚く丹が塗られている。胎土は良質、焼成は堅緻で、色調は黄白色をなす。復原口径16.4cm。

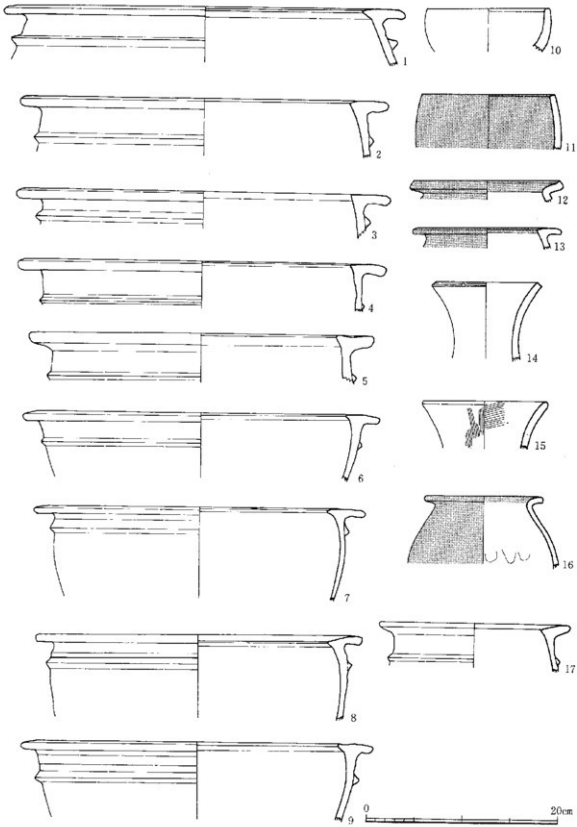


Fig. 37　B溝出土土器実測図VI

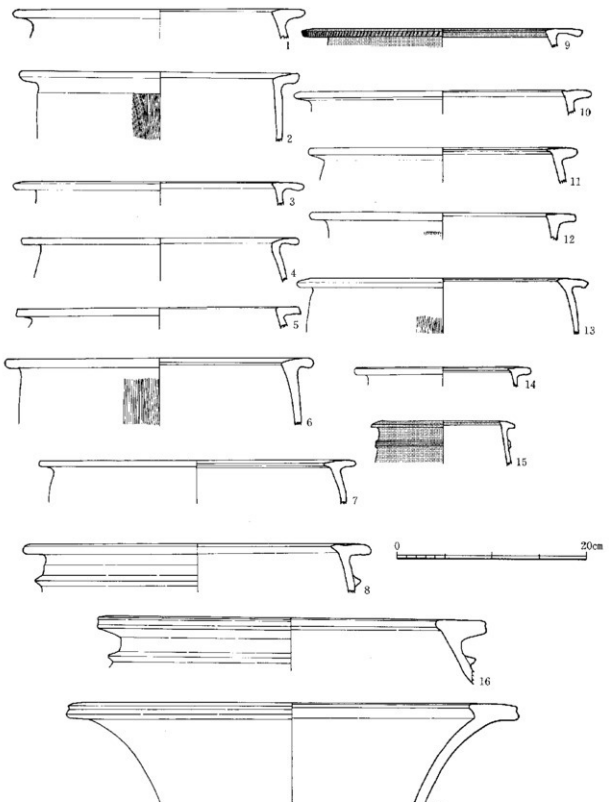


Fig. 38　B溝出土土器実測図Ⅶ

13は短頸壷の口縁部破片。頸部は内側に張り出し稜線が明瞭である。口縁部は丸味をもって横にのび、端部は丸くおさめる。胴部は大きく外に張る。口縁部から外面にかけて丹塗りされる。胎土は精製され良質。焼成は良好。色調は白赤色をなす。復原口径15.8cm。14、15は器台、筒形をなす。14は口縁端部は平坦に仕上げ、凹線一状をめぐらす。内外面は磨滅しているため調整等は明らかでないが、内面にはしぼりの痕跡がみられる。復原口径11.8cm。15は同様の器台である。口縁端部は丸味をもって平坦に仕上げる。外面は縦方向の刷毛目調整。内面は横位に近い斜位の刷毛目調整。口縁部付近が赤く変色しているので、あるいは脚部かもしれない。胎土には砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は外面が黄白色～赤褐色、内面が赤黄色をなす。復原口径13.6cmを測る。16は無頸壷の胴部から口縁部にかけての破片である。口縁部はくの字形に大きく外反し、端部は丸くおさめている。胴部は下方にむかって拡がり、胴部最大径は胴中位にあると考えられる。内外面共に横ナデ調整で、胴中央部に指圧調整痕が残っている。口縁部内側から外面にかけて丹塗りが施されている。胎土には若干の砂粒が混入されているが良質。焼成は良好で、丹塗りの下地の色調は赤黄色をなす。復原口径12.6cmを測る。17は小型の甕形土器である。口縁部はやゝ上方にたちあがり、口縁下に断面三角形の貼付け突帯一条をめぐらしている。口縁内側の張り出しも顕著である。内外面共も横ナデ調整。胎土には多量の砂粒を含んでいる。焼成は堅緻、色調は内外面共に黄褐色をなす。

Fig. 38は17を除いて他はいずれも甕形土器である。1は全体に磨滅し、調整痕等は明らかでない。復原口径31.0cm。2は口縁部がやゝ上方にたちあがる。外面には縦方向の刷毛目調整が施される。外面の頸部から内側にかけては横ナデ調整である。復原口径29.8cm。3は口縁端部がやゝ肥厚し、丸くおさめる。内外面共横ナデ調整である。復原口径30.8cm。4は口縁部がやゝ上方にあがり、端部がやゝ肥厚し、丸くおさめている。口縁内側の稜線はやゝ不明瞭。復原口径29.6cm。5は口縁端部が平坦に仕上げられ、凹線一条がめぐる。口縁端部はやゝ肥厚している。内外面共横ナデ調整。復原口径30.2cm。6は外面が縦方向の刷毛目調整、口縁部から内面にかけては横ナデ調整である。復原口径32.8cm、7は口縁部内側の張り出しが顕著である。胴部が張る。外面は縦方向の刷毛目調整であるが、不明瞭。口縁部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径33.8cm。8、16は口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。8は口縁内側の張り出しが強い。外面は縦位の刷毛目調整であるが、横ナデ調整によって消されている。復原口径36.8cm。16は口縁端部は平坦に仕上げ、凹線一条をめぐらしている。内外面共に横ナデ調整。胎土は精製され良質、表面にスリップがかけられている。焼成は良好で、内外面共赤褐色をなす。復原口径41.6cm。9は口縁部が大きく外に引きのばされ、端部は肥厚する。口唇部にヘラによる刻目を入れる。口縁部から外面にかけて丹塗りが施される。復原口径30.0cm。10は復原口径31.8cm。11は内外面共に横ナデ調整。復原口径28.8cm。12は外面に縦位の刷毛目調整がみられる。頸部から内面にかけては横ナデ調整。13は口縁端部がさがる。外面に縦方向の刷毛目調整が施されるが、残存状態は良くない。復原口径は12が28.4cm、13が31.0cm、14が19.0cm。15は口縁部平坦面が下方にさがり、端部は平坦に仕上げている。口縁下に貼り付けのM字突帯一条をめぐらす。口縁部から外面にかけて丹塗りが施される。復原口径15.4cm。17は鋤形口縁をもつ壷形土器である。口縁端部に凹線一条をめぐらす。内外面はヘラ研磨調整とみられるが、残りが悪い。復原口径48.2cm。胎土は9、11、12、17は精製され良質、他は砂粒を多く混入している。焼成は良好である。

Fig. 39はいずれも甕形土器である。1～8、10～14の口縁下に突帯をもたない土器、16～17のくの字形口縁に近い土器、9、18～20の口縁下に突帯をもつ土器の二類に分類できる。1は外面に縦位の刷毛目調整。頸部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径33.0cm。2は口縁端部が平坦に仕上げ

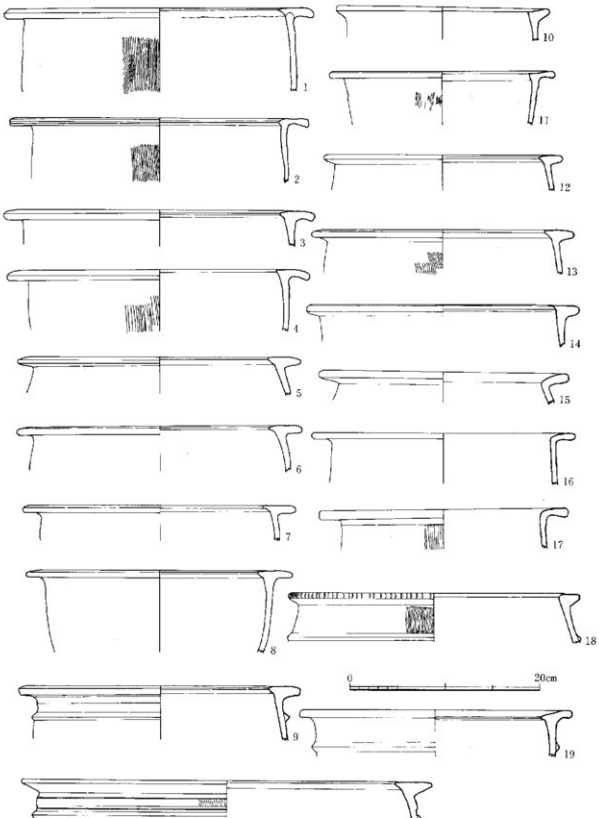


Fig. 39　B溝出土土器実測図Ⅷ

られ、凹線一条がめぐる。外面は縦位の刷毛目調整で、ススが付着する。復原口径31.8cm。３は外面に刷毛目調整を施すが不明瞭。ススが付着している。復原口径33.0cm。４は外面に縦位の粗い刷毛目調整を施す。頸部から内面にかけては横ナデ調整である。復原口径32.0cm。５は内外面共横ナデ調整である。復原口径30.0cm。６は外面に縦位の刷毛目調整が施されるが、不明瞭。一部にススが付着している。口縁内側の張り出しは強い。頸部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径30.2cm。７は口縁の内側の張り出しが強い。内外面共に横ナデ調整で、外面の一部にススが付着している。復原口径29.0cm、８は胴部が張らず、鉢状をなす。口縁部の内外面は横ナデ調整。復原口径28.2cm。９は口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。口縁端部は平坦に仕上げ、内外面は横ナデ調整。復原口径29.8cm。10は口縁端部を平坦に仕上げている。全体に磨滅しているが、口唇部にススが厚く付着している。復原口径22.8cm。11は外面に一部刷毛目調整がみられるが、上から横ナデ調整が加えられている。復原口径24.0cm。外面に黒斑がみられる。12は磨滅し、内外の調整は不明。復原口径25.6cm。13は外面に一部、縦位の刷毛目調整がみられるが、器面が荒れているため不明瞭。復原口径28.0cm。14は内外面共に横ナデ調整。復原口径29.0cm。15はくの字形をなす。口縁端部が肥厚し、丸くおさめている。内外面共に横ナデ調整を加えている。復原口径26.8cm。16は薄手の土器である。口縁部は屈曲し、平坦になっている。口縁端部は肥厚し、まるくおさめている。復原口径28.2cm。17も口縁部がくの字形に屈曲させている。口縁内側の稜線は不明瞭。口縁端部は肥厚し、丸くおさめている。外面には縦位のやゝ粗い刷毛目調整を施す。頸部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径26.6cm。18は口縁部はあまりのびず、断面三角形に近い。口唇部にヘラによる刻目が施される。口縁下には断面三角形の貼り付け突帯一条がめぐる。口縁と突帯間は縦位の細かい刷毛目調整。突帯の両側と口縁部から内面にかけては横ナデ調整。復原口径30.2cm。19は口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。内外面共に横ナデ調整である。復原口径29.2cm。20は口縁部が先ぼそりになり、端部は丸くおさめている。口縁部の断面は三角形をなす。口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。頸部に強い横ナデを加え凹ませ、突帯の上位にもヘラによる沈線二条をめぐらしている。この間にはさまれた部分には縦位の刷毛目調整痕が残り、文様効果をだしている。口縁部から内面にかけては横ナデ調整を加えている。１～20の胎土は砂粒を混入している。焼成はすべて良好である。

(6)　B 溝出土石器（Fig. 40）

出土石器には太形蛤刃石斧、抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石斧、石庖丁、石鏃、石庖丁未製品、凹石、磨石、砥石、叩石、ナイフ形石器、使用痕ある剥片等がある。主体は弥生時代の所産であるが、旧石器時代等の遺物も若干混入している。以下、個々について説明を加える。

旧石器時代の石器（Fig. 40－１、２）

２点ある。共に古銅輝石安山岩を素材としている。１は不定形の剥片、側辺の二辺に使用痕がみられる。打面は原石の面がそのまま残っている。長6.6cm、幅4.6cm、厚さ1.8cm、断面三角形で、エッジには鋭い刃部を形成する。２は縦長剥片を利用したナイフ形石器、打面は原石の面のままである。片面には５面の剥離面がある。先端部は斜めに切断され、主要剥離面側からブランティングが施される。ブランティングは側辺の一部にもおよんでいる。各所に新しいガジがある。長5.6cm、幅2.6cm、厚さ0.8cmを測る。共に風化が著しいが、１がより風化している。周辺部に包含層が存在していたと考えられるが、確認されていない。

弥生時代の石器（Fig. 40－３～５、41、42）

縄文時代に共通する石器も一部に存在するが、一応、弥生時代の所産として説明をすすめる。

3は安山岩質の打製石斧と考えられる資料である。風化が進んでおり、剥離も明瞭でない。長楕円形の自然礫に打撃を加え整形するが、一側は挟りを入れたような状態となっている。刃部も剥離を加えて作り出されるが、磨滅している。所属時期を弥生時代とするには躊躇するが、決め手がないので縄文時代から弥生時代に属するものと考えておきたい。長12.6cm、幅4.6cm、厚さ2.0cmである。4は凹石。大型の安山岩質の円礫を利用している。長径12.6cm、短径9.4cm、厚さ6.6cmで、平坦な両面の中央部に径2.2cm、深さ0.3cmの打痕による凹みが存在する。図示していないが、磨石の破片1点がある。安山岩質の円礫が利用されるが、全体の1/5程度を残すのみである。三面に磨耗痕が残っているが、特に平坦な両面が顕著である。5は扁平な安山岩質の円礫を利用している。平坦な二面が砥石に、周縁部が打器として使用されている。砥石として使用された平坦面は、片面が部分的使用で、他の一面に顕著な磨耗痕がみられ、直線的な面をつくり出している。周縁の敲打痕が顕著であるが、他の一辺にはわずかに打痕がみられる程度である。また、一部には条線状のキズが認められる。半折し、長さ4.6cm＋α、幅5.6cm、厚さ1.4cmを測る。

石庖丁未製品（Fig. 41－1～5、7、9、11）

石庖丁未製品と考えられる資料8点がある。1は凝灰岩質ホルンフェルスを素材としている。周縁部に打撃を加え、長方形に整形しているが半折し、現状では方形をなしている。両面には粗い研磨が加えられ平坦にし、背と考えられる一辺には条線状の加工が加えられている。長さ16.2cm、幅4.6cm、厚1.2cm。2は板状に剥離した頁岩を素材としている。一辺に整形のための加工が加えられているが、他の三辺は折断されている。現存長5.0cm、幅4.4cm、厚さ0.4cm。3は2と同様の板状に剥がれた頁岩を素材としている。中央部がやゝふくらんだ長方形に整形されているが、半折している。刃部には一部であるが研磨が加えられている。現存長8.2cm、幅5.0cm、厚さ0.5cm。4は凝灰岩質ホルンフェルスを素材としたものである。刃部の一部が現存するのみで他は折断している。両面には粗い研磨痕が縦位で施され、刃部は細い研磨で刃がつくり出されるが、片刃状をなす。刃部からすれば完成品であるが、表裏面には敲打痕が残っていることなどから、未製品とも考えられる。現存長3.8cm、幅4.2cm、厚0.8cm。5は板状に剥離した頁岩を素材としている。背から孔の部分にかけての破片である。周縁部に剥離を加え整形し、孔は敲打によって穿たれていて、一孔を完全に穿孔し、二孔目の途中で破損したと考えられる。現存長7.8cm、現存幅3.4cm、厚さ0.8cm。7は板状に剥離した頁岩を素材としている。孔の部分で半折しているので、ほぼ全形を知ることができる。形は三角形に近い外湾刃三日月形石庖丁で、形態的には前期の石庖丁に近い。背面および刃部に研磨が加えられ、刃部は両面から研磨された両刃をなしている。表裏面は大部分が節理の剥離のままで、一部に研磨が加えられているにすぎない。孔を一部を残すにすぎないが敲打による穿孔である。これだけでも完成品として充分使用可能であるが、表裏面に研磨がおよんでいないことから未製品とした。現存長7.2cm、幅6.6cm、厚さ0.6cm、復原長17cm前後となろうか。9も他と同様に節理で板状に剥離した頁岩を素材として利用している。周縁部に剥離を加え整形した段階で両端部が折断している。背の部分は原石のままである。現存長6.2cm、幅5.8cm、厚さ0.5cm。11も板状に剥離した頁岩を素材として利用している。背の部分は原石の状態のままである。刃部は両面から研磨が加えられ両刃をなす。表裏面は研磨が加えられているが充分ではない。孔の一部が残っている。それからすると孔は敲打による穿孔であるが、穿孔段階で半折した可能性が強い。端部も折断されている。全形は6で想定した形になると考えられる。現存長5.6cm、幅5.2cm以上、厚さ0.7cmを測る。

石庖丁（Fig. 41－6、10、12、Fig.42－1～3）

6点が出土しているが、ほとんどは破片で、完形を保つのは1点のみである。

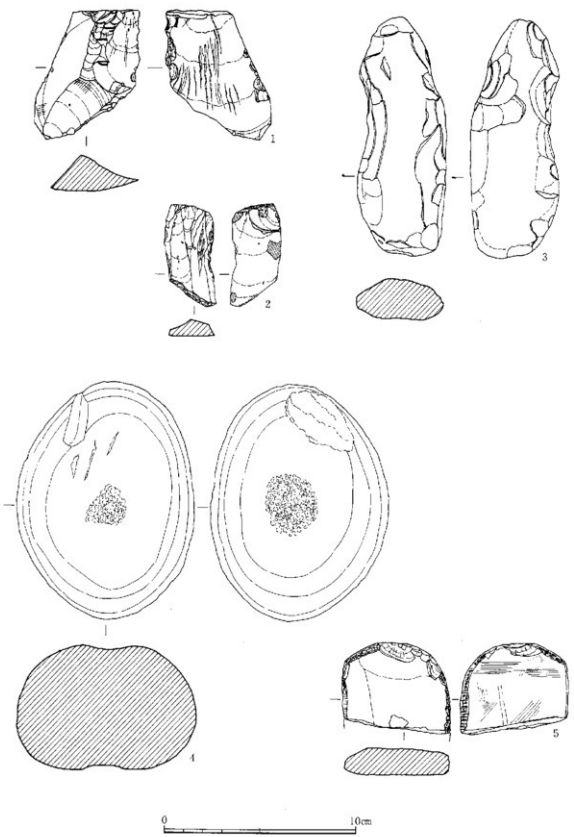


Fig. 40　B溝出土石器実測図 I

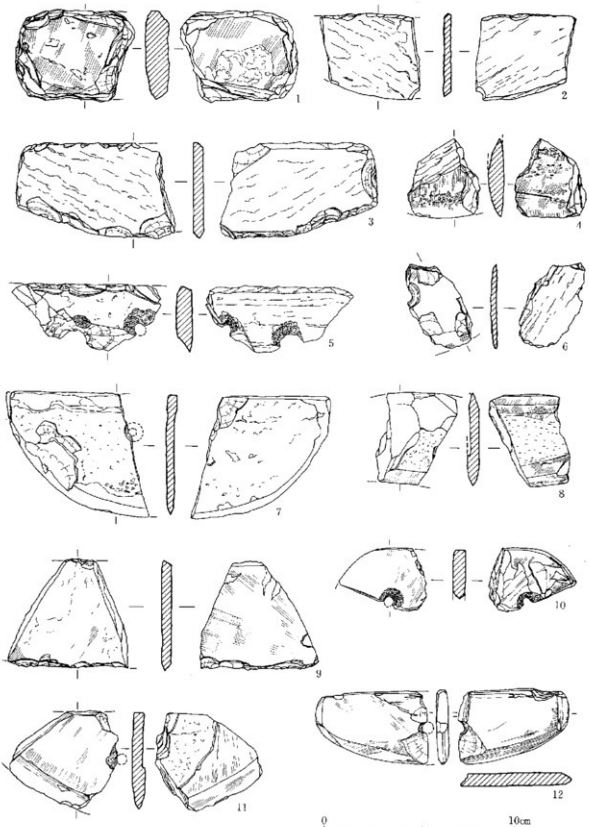


Fig. 41　B溝出土石器実測図Ⅱ

Fig. 41－6は板状に剥離した頁岩を素材とした小破片である。孔と刃部の一部が残っている。孔はドリルによって穿孔される。全面に研磨が加えられるが、剥離しているために裏面については不明。現存長3.4cm、現存幅5.0cm、現存厚0.4cm。10は凝灰岩質ホルンフェルスを素材として利用している。背と孔を残す破片で全形を知ることはできないが、一般的な外湾刃の石庖丁と異なり、背が弧状になっている。直線刃の可能性が強い資料である。全面に研磨が加えられている。孔は約半分が残っている。復原孔径0.5cm。穿孔のやり方は径1.2cmの範囲で両面から敲打を加え、凹ませ、次にドリルの回転を両面から加え、穿孔させるやり方を行っている。現存長4.6cm、現存幅3.3cm、厚さ0.7cm。12は頁岩を素材として利用している。孔の部分で半折しているが全形を知ることができる。やゝ細長い外湾刃の石庖丁で、中期の特徴をそなえている。全体に良く研磨されている。刃部は両面から研磨が加えられ、両刃をなすが、後述するように半折した段階で石斧に転用されているため、刃部に研磨が加えられ刃潰しがおこなわれている。孔は石錐によって両面から穿たれているが、ほぼ垂直に近い角度であけられている。復原孔径0.6cm。この石庖丁は半折後に加工を加え石斧として再利用している。折断面に研磨を加え、わずかな平坦部をつくり、それと逆の先端部に両面から研磨を加え、刃をつくり出す。刃部幅2.0cm。背はそのままで、石庖丁の刃部は先述したように刃潰しが加えられている。石庖丁と石斧の研磨には若干の違いが認められる。石斧の刃部には使用痕と思われる刃こぼれと磨滅がみられる。現存長5.8cm（石庖丁としての復原長14.0cm前後）、幅3.8cm、厚さ0.7cmを測る。Fig. 42－1は唯一の石庖丁の完形品である。細長い外湾刃をなす。凝灰岩質ホルンフェルスを素材として利用している。背はほぼ直線をなす。刃部は両面から研磨された両刃をなす。孔は中央部に二個並列して穿たれ、孔間は2.5cmを測る。孔径は共に0.6cmで、石錐によって穿たれている。長さ15.6cm、幅4.0cm、厚さ0.7cmを測る。2は孔付近の小破片。両側を欠損している。板状に剥離した頁岩が素材として使用されている。背は直線的で、刃部は湾曲しているので、1と同様の細長い外湾刃の石庖丁とみられる。刃部は両面から研磨される両刃である。孔の一部が現存し、復原孔径0.6cm、両面から石錐で穿孔されている。なお、石庖丁端部側の折断面には一部研磨が加えられており、折断後も使用されていたことがうかがえる。孔の位置が背より刃部に近いことを考えれば、かなりの使い込みがあったことが推測される。片面は風化が著しく、研磨痕等は全く不明。現存長3.5cm、幅4cm以上、厚0.6cm。3は凝灰岩質ホルンフェルスを利用している。半月形の外湾刃である。孔から端部にかけての一部を欠損している。刃部は両面から研磨が加えられ両刃をなす。中央部は使用による研ぎべりで刃部は直線になる。背はやゝ丸みをもっている。孔は石錐によって両面から穿孔される。孔径0.3cm。孔間は2.8cm前後である。現存長8.9cm（復原長14.2cm前後）、幅4.0cm、厚さ0.7cmを測る。

石鎌（Fig. 41－8、Fig. 42－5）

2点がある。共に板状に剥離する頁岩が素材として使用されている。8は基部に近い部分の小破片である。背部と刃部に両面から研磨が加えられているが、他は剥離面のままである。背には刃潰しの研磨が加えられる。刃部はやゝ内湾し、両刃となる。現存長3.0cm、幅4.9cm、厚さ0.7cm。5は先端部の破片である。先端の一部を欠失するが、先端は内湾気味に尖ると考えられる。全体に研磨が加えられているが、磨滅していて研磨の方向等は不明。背は平坦に研磨され、刃部は両面から研磨された両刃である。表面は石の節理が鎬状の文様となっている。現存長8.4cm、幅4.0cm、厚さ0.7cmを測る。

磨製石斧（Fig. 42－4、6～9）

先の再利用品を除いて5点の磨製石斧がある。太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、挟入柱状片刃石斧等、弥生時代の特徴的な磨製石斧がそろっている。

4は小型の扁平片刃石斧である。完形品であるが、側辺の一辺と頭部に、全面におよぶ剥離がみら

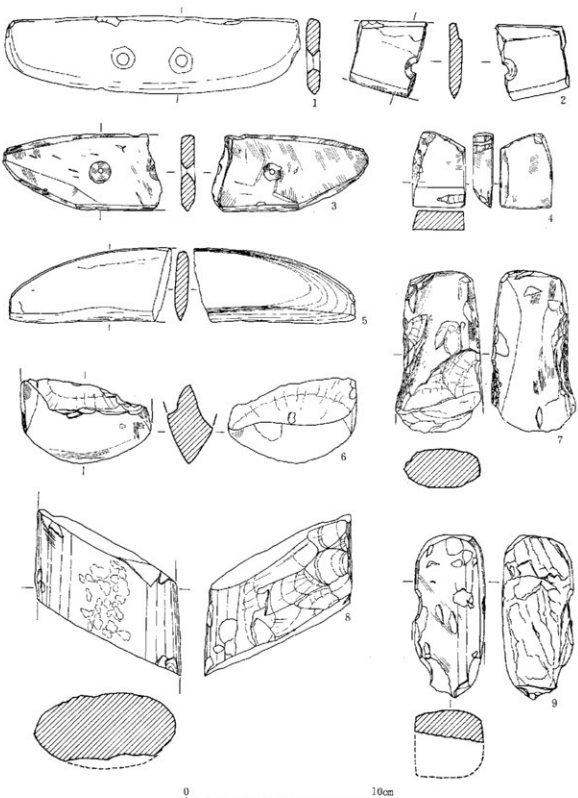


Fig. 42　B溝出土石器実測図Ⅲ

れ、部分的に研磨が加えられていることから、再生品と考えられる。上記以外の面は全面に丁寧な研磨が加えられている。刃部は片面からの研磨で形成される。粒子の細かい石材が素材として利用されている。長さ4.0cm、幅2.8cm、厚さ1.0cm。6は玄武岩製の太形蛤刃石斧の刃部破片である。刃部を弧状をなし、断面形は蛤刃をしている。全体に良く研磨されているが、やゝ磨滅するため研磨等の詳細は明らかにできない。現存長4.5cm、幅6.8cm、厚さ2.8cm以上である。7は粘板岩質の石材を利用した磨製石斧で、刃部を欠失している。頭部は方形に仕上げ、側面には整形のための剥離痕、打痕が残っている。側辺の一辺は抉り状になっている。全体に研磨が加えられている。現存長8.5cm、幅3.5～4.5cm、厚さ2.0cm。8は今山産玄武岩を素材とした太形蛤刃石斧の体部破片、頭部、刃部共に欠損している。節理によって割れたのか斜に平行に割れている。表面には一部、敲打痕が残るが、側面を中心に丁寧な研磨が加えられている。現存長8.7cm、幅7.8cm、復原の厚さ3.9cm、断面形は楕円形をなす。9は抉入柱状片刃石斧の破片であるが、縦に割れ、かろうじて抉入石斧であることがわかる。抉入部は幅1.5cm前後、深さ0.3cm、表面には全体に研磨が加えられているが、やゝ磨滅し研磨の詳細については不明。粘板岩質の石材が素材として利用されている。刃部の形状は不明。現存長8.6cm、幅3.7cm、厚さ1.6cm以上を測る。

(7) B溝出土土製品 (Fig. 43)

紡錘車、投弾、滑車形耳飾り等がある。滑車形耳飾り、投弾を図示した。(Fig. 43)

1は滑車形耳飾り。上面、下面共に円形で、上面径25.5mm、下面径27.5mm、輪状をなし、中央部は径1cmの孔がある。側面は中央部が凹み滑車状をなす。全面は丹塗りされているが、部分的に丹が落ちている。胎土には石英砂粒を混入しているが良質、焼成は良好で、丹の下は白黄色をなす。縄文時代の滑車形耳飾りの系譜を引くものと考えられる。弥生時代のものとしては極めて珍しい。祭祀に使用されたものか。2、3は土製投弾である。手づくねで紡錘形に整形されている。2はやゝ短かく、長さ2.9cm、断面形は円形で径1.7cm。3は長さ4.2cm、径1.9cmである。2点とも淡褐色～褐色を呈し、胎土には石英の砂粒を含む。焼成は良好。

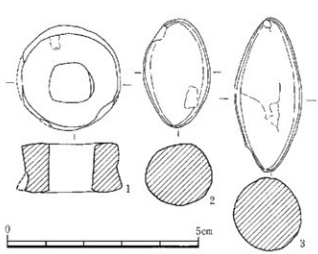


Fig. 43 B溝出土土製品実測図

第4章　調査のまとめ

今回報告したのは、板付の中央台地の西側沖積地の G－7c 区と南台地と中央台地の鞍部の F－8b 区の二ヶ所の調査報告である。G－7c 区は最も古くさかのぼる刻目突帯文土器単純期と板付Ⅰ式土器期の水田遺構が確認された G－7a、7b 区の西側にあたり、古い水田遺構の拡がりを考察する上には、欠かせない調査区である。また、F－8b 区は、これまで状況が全く明らかでなかった、台地の鞍部に位置し、弥生時代における鞍部の使用状況を知る上ではかかせない調査区である。

調査では、それぞれ目的の成果を得たので、ここで、整理し、まとめに変えたい。

1．G－7c 区の調査成果

調査区の位置は先にのべたように、古い水田遺構の拡がりを知る上では欠かせない地区であったが、遺跡を保存するための試掘調査という制約上、調査区を拡大できず、また、堆積土が 2 m 前後と深いために、調査の主眼を土層観察においた。土層観察の結果は、調査目的を充分に満たす成果を得ることができた。

先ず、成果の一つは、古諸岡川の左岸の確認があげられる。これによって、板付遺跡の西側沖積地における古諸岡川の流路が推定できるようになった。古諸岡川は西側沖積地のほぼ中央を汇濫原も含めて幅約100m の流路が蛇行しながら北流している。そして、この流路の両岸が低位段丘面となっていることがわかってきた。つまり、水田はこの低位段丘上につくられていることが判明したのである。

次の成果は、土層観察の結果、G－7a、7b 区で検出した刻目突帯文土器単純期、板付Ⅰ式土器期の水田耕作土がトレンチ内でも確認され、古諸岡川の川岸まで延びていることである。また、所々に畦畔や水路が確認されている。このように水田の拡がりがわかり、西限が判明したことは、初期の水田の範囲確認のためにはかかせない成果である。

また、土層観察の結果、堆積の大部分は水田耕作土と考えられ、突帯文土器単純期以来、現在まで、この沖積地が水田として利用されてきたことが確認できた。その意義は大きいものがある。

2．F－8b 区の調査成果

F－8b 区は中央台地と南台地の鞍部の西側門口部に位置している。この鞍部には周辺の試掘結果から、板付Ⅰ式土器期の幹線水路が、台地を切断するような状態で堀切りされていることが推測できる。本調査区は、この水路際の左岸に立地している。遺跡の性格は充分に把握することはできなかった。考えられるところを整理しておこう。

遺構として土坑と溝がある。土坑は一列に並んでいるが、規模や形はそれぞれ異なっている。第2号土坑が出土遺物から古代に下る以外は弥生時代に属している。丹塗り磨研の壷形土器、高杯形土器、甕形土器が出土土器のかなりの構成を占めていることは、これらを祭祀遺構とみることもできるが、積極的な根拠はない。

溝は B 溝、C 溝が弥生時代、A 溝は時期比定はできないが、遺構の切り合い関係から、弥生時代以降のものと考えられる。A 溝、B 溝は東西の方向をもち、台地を横断するように流れている。先の板付Ⅰ式土器期の幹線水路と同じであり、この鞍部が当時、流路となっていたことが考えられる。

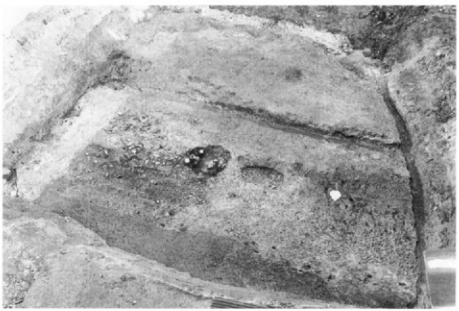
B溝の埋土中からは多量の弥生土器、石器が出土している。弥生土器の中に丹塗り土器の占める割合が高いことを考えれば、何らかの祭祀行為が行なわれたと見ることができるが、土坑同様にその確証はない。ただ、土器の出土状況は中央台地西側に見られる土器層と良く似ている。それからすれば、南台地、あるいは中央台地から投棄、あるいは流れ込んだ土器群とみることもできる。石器の存在はそのことを裏づけるものと考えられる。

出土石器は石庖丁、石鏃、石斧等、弥生時代のものが多いが、一部、ナイフ形石器等の後期旧石器も含んでいる。周辺部に同時代の包含層があったものと考えられる。なお、石庖丁の未製品も多量に出土している。石材は板状に割れる頁岩を利用している。出土品から、その製作工程を復原すると次のようになろう。

①板状に割れた石材の入手　②石材の周辺部に剥離を加え整形　③敲打による穿孔（一部には石錐による穿孔もある。また、両者が同一の石庖丁に見られる例もある。）　④刃部に研磨を加え、刃をつくり出す。　⑤全体の研磨の工程が観察できる。なお石庖丁の半折品に再加工を加え、石斧に転用した珍しい例もある。

この他、注目される遺物として土製品の耳飾りがある。滑車形の耳飾りで、全体に丹塗りされている。胎土、焼成等からは明らかに弥生時代に属するものである。縄文時代の耳飾りの遺存形態のものと考えられる。

図　版
PLATES



(1) F－8b 区全景

(2) F－8b 区近景

(3) F－8b 区土層断面

PL. 2

(1) F－8b区
第1号竪穴

(2) F－8b区
第3号竪穴

(3) F－8b区
第3号竪穴遺物出土
状況

(1)　F－8b区・第1号竪穴遺物出土状況　(2)　同・拡大　(3)　同・拡大

PL. 4

(1) F－8b区
遺物出土状況

(2) F－8b区
遺物出土状況拡大（把手）

(3) ジョッキ形土器
把手

(4) 壺破片

(1) F－8b区
遺物出土状況

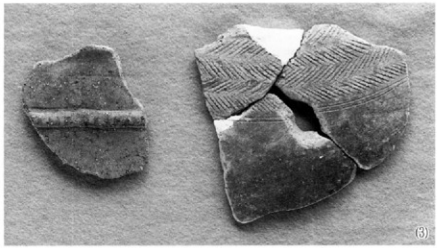
(2) F－8b区
遺物出土状況
（石庖丁片）

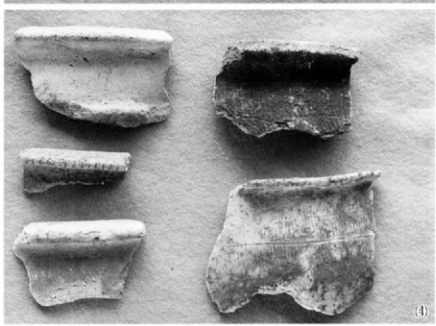
(3) F－8b区
遺物出土状況
（紡錘車）

PL. 6

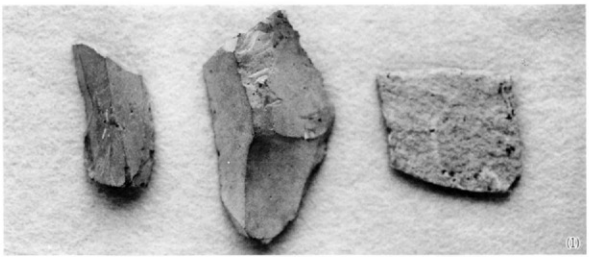
遺物出土状況　(1)　石庖丁　(2)　石庖丁片　(3)　石庖丁未製品（失敗品）

(1) (2)　F－8b 区出土打製石斧
(3)　G－7c 区出土土器
(4)　G－7c 区出土土器
(5)　F－8b 区出土凹石

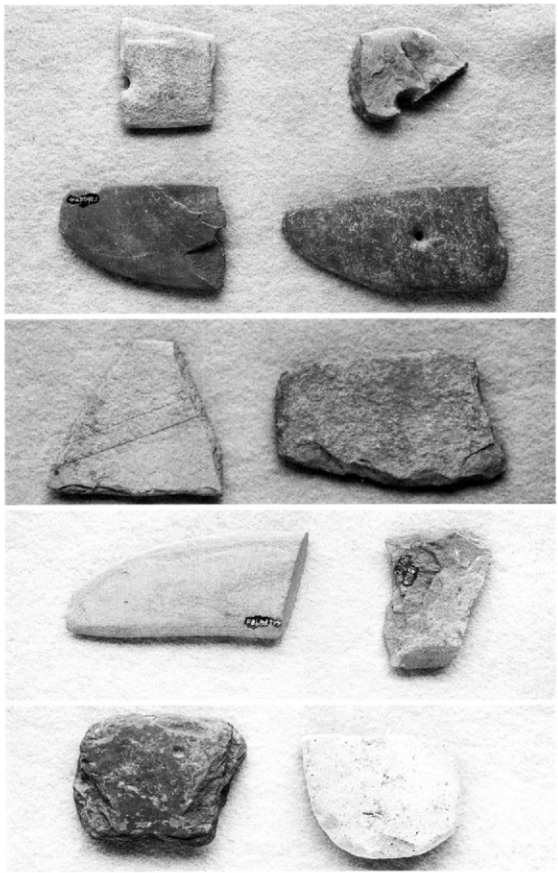




PL. 8



F－8b 区出土石器　(1)　ナイフ形石器、使用痕ある剥片、石庖丁未製品（失敗品）
(2)　同上裏面
(3)　石庖丁未製品（失敗品）



(1)

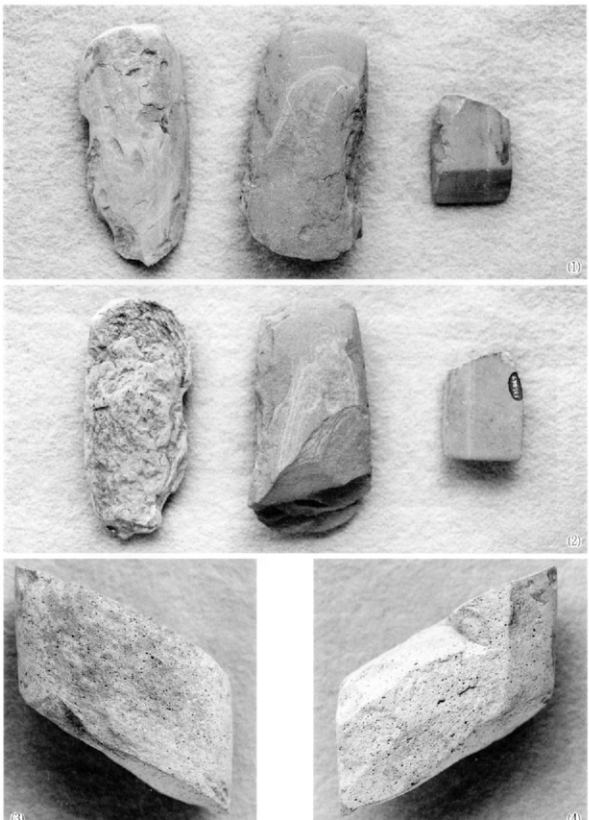
(2)

(3)

(4)

F－8b 区出土石器 (1) 石庖丁 (2) 石庖丁未製品(失敗品) (3) 石鏃 (4) 石庖丁未製品(失敗品)、石斧

PL. 10



F－8b 区出土石器　(1)　抉入柱状片刃石斧、石斧、扁平片刃石斧
(2)　同裏面　(3)　今山産太形蛤刃石斧　(4)　同裏面

福　岡　市
板付周辺遺跡調査報告書第22集

— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第680集 —

2001年（平成13年）３月30日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号
印　刷　㈱川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭六丁目６－41